

---

# TRUMP?

四季 華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TRUMP?

### 【Nコード】

N9957V

### 【作者名】

四季 華

### 【あらすじ】

以前書いたTRUMPという小説の続編です。

妖怪が蔓延っているこの世界。人間と妖怪の均衡が崩れた世界では、妖怪達がかかわる事件が多発していた。そんな中で妖万屋を開く少年四季春一と助手の夏輝。更に丈や琉妃香といった仲間たち。少年はこの世界をつなぎとめるため、事件の解決に疾走する。妖怪と人間が巻き起こすアクション・ファンタジー。

## プロローグ（前書き）

TRUMPの続編です。

話を見て気になりましたら、前作も見ていただけると幸いです。

## プロローグ

妖怪たちが蔓延っている世界。それは当たり前のものだった。人間と妖怪達はお互いに支えあいながら共存してきた。数世紀前までは。

科学が進歩したこの世の中で、妖怪は次第に住処をなくしていった。肩身は狭くなり、光は人間達だけに当たった。

本来共存するはずの人間と妖怪。その二つの力が均衡できなくなった現在、妖怪を含めた世界はぐにやりと曲がっていた。

しかし一般の人間達に妖怪はわからない。妖気を感じ取れないからだ。妖怪と言えども、能力を発揮するまではただの人か、あるいは妖精。故に、妖怪の存在は今や一部の人間しか知らない事実になっている。

そんな一部の人間が、集中的に存在する場所があった。それがここ、数珠市。日本の真ん中ほどに位置するとある県の西部地域。ただの行政都市に、妖気を感じ取れる人間が数人。そして、その中でも特に妖怪に関わっている者が二人。彼らは「妖万屋」を名乗り、文房具店を拠点に活動していた。

大学生の四季春一こそ万屋の主人であり、それを援護するのは助手の夏輝だ。彼らは特性の呪符を用い、犯罪行為をする妖怪達を取り締まっていた。

枢要員という妖怪世界の警察組織も動いてはいるが、彼らも妖怪だけに人間との揉め事は出ていけない。そういう時にも活躍するのが春一達である。

また、万屋の彼らは人間から寄せられた妖怪にまつわる揉め事も解決しており、人間界でも一部の人間は彼らを利用していた。

そんな文房具屋に今日も悩める人間がやってくる。その胸に漠然とした不安を抱きながら。

四季文房具店の扉を叩いたのは、一人の男だった。見た目三十代前半だろうか。黒髪はきつちりと分けて、一目で安物だと分かる上下そろっていないスーツを着ていた。

「いらつしゃいませ」

入ってきた男に、文房具店の店主、夏輝が挨拶をした。百八十センチ以上ある長身に、艶やかな黒い髪。整った顔立ちにかかる淵なしのメガネが知的な雰囲気醸し出し、身なりは清潔。シミひとつない真っ白なワイシャツにきつちりと折れ目のついた黒いズボンは、シンプルなのだが彼が着こなすところかオシャレに見える。

「あの、ここは妖万屋さんですよ？ ネットの噂を利用してきたんですけど……」

男がおどおどと言うと、夏輝は小さく頭を下げた。

「そのようなお話は、こちらで」

文房具店が入って右奥に仕切りで囲まれた一角があり、そこには応接用のソファとテーブルが置かれていた。左奥には二階へと通じる階段があり、家の二階へと続いていた。

「どうぞ」

応接間の棚の上に置いてあるコーヒーマーカーからコーヒを注ぎ、男の前に差し出す。彼は一言礼を言ってから一口飲んで、舌を火傷した。

「すみません、熱いというのを忘れていました」

「いえ、いえ。いいんです。それであの、話なんですけど」

夏輝が頷くのを確認して、男は話し出した。

「私は里近雅さとちかまさと申します。東小学校で教師をしています」

雅の話を要約すると、以下のようなものだった。

東小学校では、近頃窓ガラスが割れる被害が続出している。窓が割られているのは、今は使っていない旧校舎の方で、一階のガラス

が一夜にして全て割られていたという。最初の発見者は雅で、朝学校に出勤したらそうになっていたらしい。そのガラスは全て張り替えて新しいものにしたが、後日また同じ被害に遭った。警察に届け出たものの、その程度の被害では相手にしてくれず、おざなりの捜査しかなかったという。他にも教室が物色された跡があり、その原因を究明してほしいというのが依頼だった。

「失礼ですが、それで妖怪の仕業というのは些か早計ではありませんか？」

夏輝が控えめに言うと、雅は難しそうな顔をしてその話を話した。

東小学校では近隣を住宅が囲んでおり、騒音問題になることからチャイムも鳴らしていなかった。しかしそれにもかかわらず、ガラスが割れる音を聞いた人が誰もいないのだ。しかし、怪しい人影を見たという情報はあるという。だがそれは新校舎の方で、旧校舎ではなかった。そしてもう一つ不可解な点が。ガラスの破片が、どこにもないのだ。細かな破片はあるものの、大きい破片はひとつ残らずなくなっているという。それで妖怪だと当たりを付けたそうだ。

「妖怪の仕業だと同僚に言えるわけもないので、ここに来たのは個人的な依頼です。なので学校からのバックアップはありませんが……どうかお願いします。調べるだけ、調べていただけませんか。実は、今日新しいガラスを張ったばかりなんです。だから、今夜あたりに犯人が現れるかもしれません」

「そうですか、わかりました。そういうことなら、お引き受けしましょう」

「ありがとうございます！」

「では、この書類に一筆いただけますか？」

夏輝が差し出したのは一枚の紙。そこには利用規約が書かれていた。まず、「どんな人間が捜査しても文句を言わないこと」という奇怪な文章が書いてあり、後はこのことを口外しないこととか、捜査には協力することとか、差支えないことが書かれていた。それに

サインして下の欄に自分の名前と住所と電話番号を書くと、夏輝はその書類を受け取った。

「ありがとうございます。では、早速捜査を始めたいと思います。妖系の捜査を担当している春一という者が協力させていただきますので、よろしくお願いいたします」

「わかりました。こちらこそ、お願いします」

雅は頭をぱつと下げて、文房具店を後にした。夏輝は彼が去った後、カウンターにある電話を取った。

「成程ねえ。学校も大変だねえ」

まるで他人事のように言うのは、四季文房具店副店主であり、妖万屋店主の四季春一。彼は二階の居住スペースで、おやつであるカップ麺を啜りながら夏輝の話を聞いていた。

短く立った茶髪は明るめで、その左サイドには銀色のメッシュが三本入っている。顔立ちは標準的だが、その目は緩くだらけていて、やる気が感じられない。左耳にはピアスの穴が開いていて、ループ状のピアスが行儀よく並んでいた。外見だけで判断するなら、不良である。

「ハル、一応自分の担当なんですから、もうちょっと責任感を持つてください」

注意する夏輝は彼に対しいつも敬語だ。それは夏輝が春一の弟子のようなものだから、という理由であり、そして夏輝の元々の性格上、敬語が癖なのだ。

「そう言われてもねえ。はあーあ、俺明日大学一限からなのに。今日は夜更かし決定だなあ」

だるそうにソファにふんぞり返る春一に、夏輝はこぼれそうになっているカップ麺を取り上げて注意した。

「まあ、暇潰しにやるか」

にやつと笑った春一に、夏輝は思った。何か企んでいる。この人には、敵わない。

夜が更けたころ、東小学校の旧校舎の外には春一達の姿があった。「どこに行ってたんです？」

少しの間席を外していた春一に、夏輝が問いかける。彼の顔はどこか嬉しそうで、不吉なことこの上ない。

「ちよつと、学校の中にね。俺の母校だからさ、懐かしくなっちゃ



って」

「そうですか」

「さて、犯人を検挙しますか」

春一は楽しそうに笑って、旧校舎の中へと足を踏み出した。

校舎に怪しい影が現れる。ポツリ、ポツリ。

窓ガラスに怪しい人影が近付く。一人は窓を探っている。もう一人はその人影が離れてから、棒のようなものを振りかぶる。そこで止まる。

「はい、ヤンチャ終了ね」

春一の明るい声が響く。懐中電灯が照らされる。そこには、地元中学のジャージを来た二人組がいた。一人は手にガムテープを持ち、もう一人はバットを振りかぶった所で春一に掴まれている。

「なっ！」

「おっと、逃げるなよ」

バットが動かない。それから逃げ出そうとバットを離すが、その頃にはすでに襟首を掴まれている。

「夏」

その男子生徒を捨て置き、逃げようとしたもう一人の男子を夏輝が腕を止めて捕まえる。

「全くもー。お前ら、この大きさのガラス一枚でいくらすると思っ  
てんだ。学校赤字だぞ？」

春一が生徒をずるずると引き摺り、後ろ手を縛って近くの木に縛り付ける。もう一人も同様だ。

春一が彼らのポケットを探ると、煙草とライターが入っていた。ここで喫煙するつもりだったのだろう。

「命縮めて嬉しけりやー勝手にどーぞ。俺はオススメしない」

「何だよお前ら！」

「そりゃこつちの台詞。まあ、中学はわかるけどね。東中だろ？  
そのジャージ。入ってるラインの色からすると二年か。まったく、  
若けりや何でも許されるわけじゃねーぞ」

彼らの持ち物をポイポイと地面に捨てていると、新校舎の方から

人が歩いてきた。一人は明るい茶髪に黒いメッシュを三本入れて、子どもっぽい笑みを浮かべている。もう一人は女性で、肩まである金髪は先がカールしている。絶世の美女とはまさに彼女のことだろうと思えるほどの美少女で、目は大きくくりくりとしている。

「ハル、捕まえたぜ」

「夏兄ー！」

春一の幼馴染である丈と琉妃香がもう二人の男子生徒を連れてやってきた。彼らも同じように木に縛り付ける。

「くそっ！ 何でわかったんだ！」

「あのねー、中学生と大学生、どっちが頭いいと思う？」

噛み付く中学生の頭をポンポンと叩いて、撫でる。完全に子ども扱いだ。

「しかし考えたナ。新校舎に忍び込んで窓に人型に切った黒い画用紙を貼り付ける。遠くから見れば怪しい人影ってわけだ」

「つけたりはがしたりしてリアリティ出してたんだねー。だから旧校舎で画用紙を物色してたんだね。美術は評価五確定」

「画用紙の付け替えを交替で一人を回して、本当は旧校舎でこそこそ喫煙つてわけだ。吸殻を残さなかったのは褒めてやる。そんでストレス発散、遊び感覚で窓ガラス割り？ 青春を謳歌してるな、お前ら。ガムテープ貼って割ると音がしないって、どっから教わったんだか。ただ、ガラス片を持ち帰ったのは感心しないな。人影を作るくらいなら、ガムテープをはがして置いとけばまだ怪しまれない」  
次々と自分たちの非行をばらされ、後が無くなった中学生達はどうの音も出ない。

「な、何でわかったんだよ！」

「何で？ 俺らもやったからに決まってるだろ」

にいつと笑う春一は反則だ。丈と琉妃香が思い出し笑いをする。

「まあ、俺らの時は鍵の横をバーンで割るだけだったし、人影なんかも作んなかったけどな。喫煙のためじゃなくて、肝試しのために忍び込んだんだかからな。あれはおもしろかった。学校でやって、

その後墓場に行つたんだ」

中学生達は何も言えない。

「まあ、お前らも中学生なんだし、補導で済むから良いだろ。これに懲りたら二度とオイタはしないことだな」

言うだけ言つて、春一は地面に置いた持ち物をポケットに戻し、そこを接着剤でくつつけた。そして木から四人を放し、丈と手分けして二人ずつ前を歩かせた。新校舎の中に入って、四人の少年達の内一人だけ縄を外す。

「他の三人助けて、さつさところから逃げるんだな。逃げれたら、だけど」

そう少年達に告げると、春一は校舎の扉を閉めて、さつさとそこから立ち去った。

「逃がしていいんですか？」

「逃げられやしないさ」

少しすると、校舎の中からがたがたという音が聞こえてきた。中学生達は扉を開けようと奮闘するが、扉が動かない。春一達が扉の隙間に砂利を詰めておいたただけなのだが、開かない。

四人は力で扉を開けようと、扉を押しにかかった。そして、声変わりして間もない声の悲鳴が周囲に響き渡った。

「ハル、何をしたんですか？」

「なんてことないさ。あの戸の内側……ちょうど四人が手をかけている位置にゴキブリホイホイを貼つといた。それだけだよ」  
遊んでいる、と思いつつ、夏輝は何も言えずに彼の後ろについた。

その後、悲鳴を聞きつけた近所の住民が一一〇番通報したため、少年達は発見された。発見された時には全員涙目になっていたという。そして煙草やバットが発見され、四人は全員補導された。その時、「メッシュを三本入れた不良にやられた」とみな口をそろえて言ったが、担当が春一達の知り合いの藤だったため、事なきを得た。そして四季文房具店では、いつもの朝を迎えている。

「ああ、清々しいなあ。実に清々しい。こんな気持ちのいい朝久しぶりだ」

そんな春一に何も言えず、夏輝はただコーヒを差し出した。

「ヤンキーが読書してる！」

叫ばれた高い声に、春一は眠たそうな目を向けた。その先には、女子高生。

彼は今本屋で読書中であり、女子高生は自分に合っているであろう参考書を抱えていた。

「す、すみませんっ！」

叫んだ彼女は頭をぱつと下げると、そのままレジの方へ行ってしまった。春一は二秒ほど停止し、その後再び本を読み始めた。

春一は読書家であり、暇な時は大抵本を読んでいる。夏輝が彼を上回る読書家なので、よく夏輝の部屋へ勝手に上がりこんで読みたい本を勝手に取ってくる。

彼は勉強が終わったり大学から帰ってくるとよく本屋へ行く。出版社、更に五十音順に並んでいる本棚に目を通して、面白そうなタイトルを見つけるとその本を読み出す。おもしろかったらそれを買ったり、短い話ならば読んでしまったりする。それが彼流の楽しみ方だった。しかし、読む時に本棚の前でヤンキー座りをして座り込んでしまうので、今のようなことを周りからも思われていた。声にして叫ばれることは稀だが。

春一は本を読み終え、特に買い物をするわけでもなく本屋から出た。暑い中車を運転して家へ帰ると、クーラーのよく効いた部屋が出迎えた。

「ただいまー」

春一が帰ってきたことを告げても、返事はなかった。二階の玄関から入ったため、夏輝が一階にいる場合返事は返ってこない。ということは、彼は今一階の文房具店舗にいるということだ。

リビングに入り、一階に通じる階段の上で耳を澄ませると、夏輝が何やら人と話をしていた。そして、下で二回ノックをする音が聞こえた。これは夏輝が春一を呼ぶための合図で、恐らく物音を聞いて春一が帰宅したと思ったのだろう。春一は一階へと降りた。

「ハル、クライアントの錦沙耶にしきさやさんです」

「あっ！」

高い声が叫ばれた。

「……………ども」

春一の眠そうな声が狭い店内に木霊した。

「ハル、お知り合いで？」

「ちよつとね。今さつき」

「・・・・・・・・あのお、怒ってます？」

「いいえ。僕はいたって平静ですが。僕があなたに対して憤りを覚えるお心当たりがあたりで？」

「いや、その・・・・・・・・やっぱ怒ってますよねえ・・・・・・・・」

「ですから、そのような事実は一切ございません」

笑顔で言つてのける春一は、誰の目から見ても不機嫌だった。夏輝はこの空気の打開策を考えている。目の前の女子高生はただでさえ小さい椅子の上でそれよりも身を小さくしている。

「夏、今度椅子を買おう。お客様が窮屈そうだ」

「・・・・・・・・そうですね」

「いや、そんな、大丈夫です」

あははと手を振る沙耶に、夏輝が助け舟を出した。

「どうやら顔見知りのようですね。それはさておき、依頼の方なんですが」

「ああ、教えてくれ」

要点をまとめた紙を夏輝から受け取ると、春一はそれに目を通し、一つ頷いた。

「神社に取り憑いた妖怪の退治ですか・・・・・・・・」

「そうですね。私、家が神社なんです。けど、境内で悪いことが立て続けに起こって・・・・・・・・。最初は誰かが怪我をする程度でした。けれど、それが骨折になり、転落事故になり、入院沙汰も・・・・・・・・。大きな木があつて、昔からその木の上に神様が宿るとされていました。だから参拝客の方もなるべく神様に願い事を近づけ



ようと、よく木に登られるんです。幹も枝も太くてしっかりとした木ですから、折れる心配はないんですが、転落がとて多いのです。怪我をされた方に聞くと、妖怪が襲ってきた、と言うのです。それで落ちた、と。そんな噂が広まるので、神社にもすっかり人が寄り付かなくなつて………。お願いします、どうか妖怪を退治してください！」

彼女の切願の間も春一は資料から目を離さず、思慮深げに見ていた。

「とりあえず、行ってみますか」

春一が言つて、車の鍵を夏輝に投げ渡す。

「件の神社を調べてみますので、案内していただけますか？」

春一とは違う夏輝の優しい声で言われると、なんだか安心する。

「あ、はい。お願いします」

沙耶に言われて車を進めると、一件の古びた神社に着いた。しかしそれでも鳥居は立派で、社も古びてはいるが、それが逆に荘厳さを醸し出している。春一と夏輝は最初にお参りをして、それから問題の木を見上げた。樹齡は何百年だろうか。素晴らしい桂だった。木の枝の先にはお御籤が結われており、沙耶が言っていた願い事になるべく神様に近づけるといふ行為がうかがわれた。

「やるつか、お御籤」

「はい？」

「沙耶さん、お御籤引いていい？一回いくら？」

「あ、どうぞ。一回二百円です」

「だって。夏、四百円ちょうだい」

「自分で出さないんですか……」

溜息をつきながらも、夏輝はポケットから財布を取り出して四百円を春一に渡した。春一は早速もらったお御籤を開いている。夏輝も番号を告げ、お御籤をもらった。

「吉。なんかパツとしないなあ。夏は？」

「大吉です」

「何だよ、お前ばつか。お、待ち人来るだって。やったじゃん、ついに結婚か？」

「茶化さないでください」

「んで、これをあの木の先に結うんだな。よし」

春一は木に手をかけ、それなりに高いところまで登った。そして、その枝の先に開いたおみくじを結わえる。

「……？どうしたことだ？」

春一がつぶやくが、それは下の二人には聞こえなかったらしい。

彼はそのまますると器用に降りて、調べた結果を報告した。

「沙耶さん、この件はちよつと保留にしといていいかな？ちよつと事情が込み入ってるみたいなんだ」

「わかりました。でも、解決してくれますよね？」

「まあ、それはできる限り頑張るよ。とりあえず今日は帰るね」

「ありがとうございます」

沙耶は胸に不安と期待を織り交ぜながら、頭を下げた。

二日後、春一は再び夏輝と共に神社へ向かった。

「こんにちは」。善良な市民の春一です」

「まだ根に持ってたんですか……」

隣でため息をつく夏輝を無視して春一は境内の中へ歩を進めた。掃除をしていた沙耶がこちらに気付く。

「あ……その、すみません」

「沙耶さん、お気になさらず。ウチの店主は何も気にしていませんので。それで、進展がありましたので、ご報告に」

夏輝が再び隣にやってきて、進展があつたことを報告する。その言葉を聞いた途端、沙耶の顔がパツと明るくなった。

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「沙耶さん、妖怪にはね、普通の人間が思い描く妖精のようなタイプの奴もいるんだよ。本当、体長なんて三十センチくらいでさ。そんで、ここにいるのもその手の奴。木に棲むタイプの奴で、聞いたらこの桂は立派だから住みやすいんだと。良く手入れされてるらしいな。で、それだけ」

「それだけ？だって、妖怪のせいで転落事故が起きてて……」

「転落は事故じゃねー。事件だ」

「ど、どういうこと？」

不安そうな顔をする沙耶に、春一はボリボリと髪を掻いて続き話をした。

「この神社に恨みをもった奴らが、意図的に転落して妖怪の仕業に仕立て上げたんだ。そうやってこの神社の評判を落とそうってな」

「えー！？」

「嘘みてーだけど、本当だ」

春一がやってきたのはとある事務所。地元の有志の事務所だ。ノックをすると、中から入ってもいいと声が聞こえた。

「こんにちは」

黒いジャージ姿の春一が姿を現す。事務所の主である男は、怪訝そうに春一を見た。本来ならば秘書に追い返してもらうところだが、あいにく今外出中で自分しかない。

「オツチャンさー、ちよつと悪いことしちゃったんだって？」

「は？」

いきなり応接用のソファにどっかりと腰かけ、笑いながら話す少年。違和感がありすぎる。

「マンシヨン建設に邪魔な神社に嫌がらせして、潰そうって？全く、罰当たりだね」

「……どこでそれを知った？」

男の顔が急に険しくなる。何故目の前の少年はその話を知っているのか。

「情報つてのはどこからか漏れるもんだからね。秘密つてのはないんだよ。覚えといたほうがいいよ」

「何が目的だ？金か？」

このまま話を続けるのは得策ではないと考えた男は、相手の要求を呑もうとした。しかし、相手から提示された要求は予想と全く違うものだった。

「マンシヨン建設から手を引けとは言わない。でも、神社の買収は諦めるんだね。あそこにある立派な桂の木を知ってるか？あれも切るんだろ？それは個人的に許さない。それとまあ、こっちにも色々事情があつてね」

「そ、そんなんで引けるか！お前が何者だろうと、私は諦めんぞ！あんなオンボロ神社、さっさと取り壊してやる！こっちのバックを知ってるか？」

「知らねーよ……」

春一は急に顔から笑顔を消して、ソファから立ち上がった。そのまま男が座っている机の正面に行くと、その机に飛び乗った。机の上で例の如くヤンキー座りをした春一の顔が男の眼前に迫る。

「テメーのバツクなんざ知ったこっちゃねー。だがよ、あんまオイタしてつと、俺も黙ってねーぞ……？」

そして春一は男の胸倉をつかんで、こちらにぐいっと引き寄せた。「脱税やら暴力団への献金やらをばらされなくなかったら、おとなしくこの件から手を引け。いいな？」

「は……はい」

春一に気圧された男は、そのまま急いで頷いた。春一はそれを聞き届けると男から手を離し、事務所から去った。

「解決したてくれたんですね」

後日、沙耶が挨拶に来た。神社ではあれから転落事故などは何もなく、評判も取り返しているようだ。

「別に、桂の木を住処にしてる妖怪のためさ」

「……ありがとうございます」

「まあ、君ががんばれば評判なんてすぐに戻るだろ。美人巫女登場ってな」

「そ、そんな……！」

顔を真っ赤にして手を振る沙耶に、春一は大口を開けて笑った。

「嘘だよ」

「やっぱり……って、ひどっ!？」

「まあ、がんばって。けど、これでわかったろ？」

「何がですか？」

「俺がヤンキーじゃないってこと」

沙耶は顔を俯けたまま何も言えなくなつて、また謝る羽目になった。

数珠市にそびえたつ、北神大学<sup>ほくしん</sup>。国内最難関を誇る大学は、高校生が通いたい大学ランキング一位をいつの時代も保守してきた。更に学べる分野は年々増加していることが、人気を維持し続ける秘訣と言えた。経営学から法学、福祉までをも網羅し、様々な学部、学科を有している。短期大学部や大学院もあり、敷地面積は数珠市の三分の一を占めるといふ話もあるほどである。

「丈、今日メシどうする？」

「俺三コマ目入ってるから、学食で食いてーヨ」

「琉妃香もそれでいいか？」

「いいよー」

周囲の注目を引く三人が学内を歩く。茶髪に銀色のメッシュ、それよりも明るい茶髪に黒色のメッシュ、金髪。異色のトリオが大学内を悠々と闊歩していた。

彼らトランプこと四季春一、七紀丈、五木琉妃香は北神大学の生徒だった。小学校からの親友である彼らは、一度高校で道を別つたものの、大学で再会することになった。理由は簡単、家から近いことと、学びたい学問があったから。それに加えて他の二人も行くというのだから、条件としてはこれ以上ない。

春一は心理学、丈は物理学、琉妃香は天文学をそれぞれ学んでいる。今は一年生だから一般教養の科目で一緒になることも多く、その他の授業の日程もそれなりに被っているため、三人はこうして毎日一緒にいた。

「琉妃香、そっぴやバイクの免許取ったんだよね？」

学食でそれぞれ好きなものを頼んで、料理を待っている間、春一が琉妃香に話しかけた。



「うん、車と一緒に取ったから安く済んだよ。二人の見てたら欲しくなっちゃってねー」

春一と丈は無類のバイク好きで、二人とももちろんバイクを所有している。琉妃香は今まで丈や春一の後ろに乗せてもらうばかりだったのだが、今回四輪車の免許を取得するにあたって、二輪の免許も同時に取得していた。

「バイク何にするんだヨ？」

「ステイード。実はねー、今日納車なんだよ」

ピースサインを作って子供のように笑う琉妃香の顔は本当に嬉しそうだった。それを聞いて春一と丈が顔を見合わせてにいつと笑う。

「じゃ、行くつきやねーな」

「おう。ハル、先頭頼むワ」

「え、なにになに？」

覗き込む琉妃香の顔の目の前に、二人がグーサインを突き出した。

「「ツーリング」」

春一と丈の声が重なった。

バイク屋にて。はしゃぐ琉妃香と、感嘆する春一と丈。三人はピカピカの黒いステイードを前に、それぞれ目を輝かせていた。

ホンダ・ステイード。400ccのバイクで、黒いタンクは鏡のように磨かれていた。バイク屋の店員がキーを回すと、アメリカンバイク独特の重低音が響いた。アクセルを開くと、大気を震わせる重厚な音が響いた。

「すごーい！ジョー、ハル、カッコイイでしょ！」

「おお、ステイードはやっぱりいいな。俺も迷ったもんなー」

「やっぱホンダだよナ、琉妃香。にしてもいいナ、このステイード。琉妃香、後で俺にも乗らせてヨ」

「いいよー」

その後店員から色々と指導を受け、近場を慣らし走行し、バイク屋での用事は終わった。ステイードに乗っている琉妃香と並んで、

春一と丈が自分のバイクに火を入れる。

「俺のドラスタだって負けねーぞ」

「シャドウだって負けねーぜ？」

春一はヤマハのドラッグスター400に乗っている。白いタンクにワイドハンドル。ドラッグパイプマフラーの音は一際大きく、空気を震わせていた。

一方の丈はホンダのシャドウ400に乗っていて、タンクは青と白のツートーンカラー。アップハンドルは丈こだわりの角度だ。

そして三人はバイク屋を出た。先頭が春一で、真ん中が琉妃香、最後が丈だ。ツーリングのセオリーに従って、真ん中を初心者が走るようにし、千鳥走行と呼ばれる前後ジグザグに位置しての走行を続ける。

比較的大きい真っ直ぐな道路を走る。アメリカの広大な大地とまでは行かないが、日本にも走りやすいところはある。

ここ数珠市には山が多くそびえる。周りを山に囲まれていて、その囲んでいる山々が数珠のようだったのでこの名前が付けられたという説もあるくらいだ。その山々は傾斜の緩いものからきついものまであった。傾斜の緩い山の道路はカーブも緩く、初心者がのびのびと走るには的確な場所と言えた。春一達はその山のひとつに行き、途中の休憩所で一旦休憩を入れた。

「琉妃香なかなかうまいじゃねーかよ」

「でしょ？教習の時あんまコカさなかったからね」

「琉妃香、ちよつと乗らしてヨ」

「いいよ」

丈はシャドウから降りてそのままステイードに跨った。そのまま休憩所の中をぐるぐると回っている。

「あつ、丈だけずりー！俺も俺も」

春一もドラッグスターから降りて、ステイードに乗らせてもらつ。テンションが上がるあまり、ウィリーなどしている。

「ちよつとハル！コケたらどうしてくれんの！」

「俺を信用しろ！」

「信用できねーから言ってんじゃん！」

そのまま春一が意地悪で休憩所から走り去る。琉妃香はすぐさま春一のドラッグスターに乗って、後を追いかける。丈もまたシャドウに跨って、その後を追う。

すると、春一が左カーブに差し掛かる道路の真ん中で止まっていた。琉妃香と丈が何事かと改めて前を見ると、そこでは一台の車が事故をして停まっていた。車は赤いインプレッサで、車体の後ろを流し、運転席側をカーブの内側に当てていた。ガラスが派手に割れ、車体がべこべこになっている。そこに乗っていたと見られる二人の男女は既に他の通行人によって運び出され、応急処置を受けていた。遠くから救急車の音が聞こえる。不幸中の幸いで、二人は軽いケガしかしていなかった。

「どうしてこんな緩いカーブのところで事故したんだ？ドリフトに失敗したのか？」

通行人の一人が運転手と思われる若い男に話しかける。男は座ったまま手を頭に当てた。

「それが、フロントガラスになんか動物が覆いかぶさってきたんだよ。猿みたいな。それで、前が見えなくなっただけ」

「けど、この山にはタヌキはいても猿はいないぞ？」

「でもあれは猿だった。手がスゲー長くて、確かに普通の猿よりデカかったけど、そうでないけりゃあれは妖怪だよ！」

今日も四季文房具店にはクライアントが訪れていた。夏輝はいつもの熱いコーヒーではなく、ストローを差した冷たいアイスコーヒーを差し出した。理由は、クライアントである若い男が首を傾けることができなかったからだ。

彼は首にコルセットを巻いて、頭には包帯も巻いていた。とても痛々しい姿で、全身に傷の痕があった。

「あ、すみません。ありがとうございます」

「いえ、お口に合うかわかりませんが」

「あ、うまいっす」

相談に来たのは木嶋亮介、二十五歳。以前何かの噂でこの文房具店の存在を知り、その記憶を頼りに来たらしい。彼が言うには、自分の車を数珠市内の山道で運転中、目の前に大きな猿のようなものが飛び出し、結果として事故を起こしてしまった。それが原因で、こんな姿になったのだという。しかしその猿というものがどうも引つかかる。猿にしては大きすぎるし、手が異様に長かった。助けてもらった通行人に「最近多いんだ、みんな妖怪じゃないかって噂しているよ」と言われ、気になってここに来たのだという。

「俺以外にも被害にあってる人いるみたいだし、まさか妖怪じゃないとは思っくんすけど、このままじゃ俺、事故らせたFDに合わせる顔がないっす！お願いします、調べてみてくれませんか？」

結果、夏輝は例の如く誓約書を書いてもらい、進展があったら連絡しますと言って亮介とは別れた。

「ハル、お帰りなさい」

「おー」

若干春一の顔が険しい。何かあったのだろうか。

「何かあったんですか？」

「いや、何でもねーよ。それより、それ。客来たのか？」

春一は空になったアイスコーヒーが入っていたグラスを差して言った。夏輝は事の経緯を春一に聞かせた。春一は眉間に皺を寄せて、拳を握りしめた。

翌日、春一はバイクで例の事故現場に向かった。カーブの外側にある待避所にバイクを停める。その後から、休憩所に車を停めてきた夏輝がやってきた。

夏輝はあの事故以来、様子が変わった春一を心配していた。雰囲気がピリピリしているというか、近寄りがたい空気を醸し出している。

そんなことを考えていたら、バイクのエンジン音が聞こえた。丈と琉妃香だ。

「おつ、ナツちゃんもいるじゃん。こりゃ今晚はハルン家でメシをいただくとする力」

「さんせー！」

「ええ、いいですよ」

夏輝が了承すると、二人は喜んで盛り上がった。それとは対照的に春一はいつもの柔和な感じではない。じつと虚空を見つめて、動かない。

「なあ、感じるだろ？」

春一が言った。三人は静かに頷いた。先ほどから、妖怪から出る妖気がこの辺りに立ち込めている。妖怪がこの近くにいます。

「夢亜が言うには、ここには餌えにし爾志っていう妖怪が生息してるんだそう。奴らは腕が異様に長くて、体は成人した人間ほどあるっていうデカい猿みてえな種族だ。目撃情報と一致する。奴らは単体で行動するから、恐らく一匹しかない。そいつが犯人だ」

三人が頷く。それを見届けた春一は、キーを回してバイクのエンジンのかけた。静かな夜にドラッグスターのエンジンが嘶く。

ドルン！ドルルン！！

春一はアクセルを回して、轟音を立てた。木々の葉がザア、と揺れた。

その後もエンジンを鳴らし続けると、山の中から黒いシルエットの猿のようなものが飛び出してきた。餌爾志だ。その餌爾志を春一の鋭い眼光が捉える。

「！！！」

春一は飛び出して再び山の中へ逃げ込もうとする餌爾志の首根っこを掴み、そのまま締め上げた。

「がっ……がが……」

泡を少し吹いてきたところで春一は手を離れた。餌爾志はその場に倒れこみ、春一を見上げた。燃え上がるような憤りを含めたその目に射抜かれ、餌爾志は身動きが取れなくなった。逃げようにも恐怖で体が動かない。

「テメエ……テメエが、事故を起こした張本人か……っ！」

額に血管を浮き上がらせた春一が、何とか起き上がって逃げようとする餌爾志を殴った。餌爾志はその一撃で顎が砕けて、口からだらだらと血を流している。

「ひ、ひい……」

「テメエがあっ！」

「ハル、落ち着け！」

もう一度拳を振り上げた春一を、丈が羽交い絞めにして止める。

「離せ、ジョー！」

「落ち着けっつってんだ口！」

それでも春一はまだ鎮まらない。何とか丈の抑制を振り切ろうと激しくもがく。

ドルルン！

闇夜を裂く重苦しい音が、皆の鼓膜に響いた。琉妃香が春一のバイクのアクセルを開いていた。それで春一を正気に戻したのだ。

「ひいつ！」

すかさず逃げようとする妖怪の体に細い紐が巻きつく。夏輝の呪符が妖怪を捕えた。

「い、悪戯らったんだ！」

妖怪は砕けた顎のせいでうまく回らない舌をもつれさせながら、弁明した。

「ほら、妖怪は肩身の狭い思いしてるから、それでちょっと人間に仕返しを……」

「やっていいことと悪いことの区別もつかねえのか！」

「ハル！」

妖怪は再び体をこわばらせ、ガードするように手を上げた。

「ご、ごめんなさい！もうしません！」

必死に謝る餌爾志に、夏輝が春一を振り返る。彼は激しい憎悪を以て未だ餌爾志を睨みつけていたが、丈が代わりに「ナツちゃん、離していいよ」と言った。夏輝は紐を緩めた。すると餌爾志は脱兎のごとくその場から逃げ去った。

餌爾志が視界から消えると、春一はようやく体から力を抜いた。そしてそのままバイクに跨ると、一人でどこかへと行ってしまった。



「ほらヨ、ナツちゃん」

「あ、ありがとうございます」

残された三人はひとまず休憩所に戻った。丈が自動販売機で缶コーヒーを買ってその内の一本を夏輝に投げ渡す。もう一本は琉妃香へ。

「あんな激昂したハル、初めて見ました。普段はあまり感情を表に出さない人ですから」

夏輝が言くと、丈は悲しそうに笑った。

「本当なら殴って止めるけどサ、理由を知ってる以上、殴る気にもなれなくってネ」

「理由？」

「ハルは過去に、事故でダチを亡くしてるんだ」

春一が中学校二年生に上がった時、一人の転校生がやってきた。  
あたらかずひと

「可惜和仁です、よろしくお願いします」

初日に彼が挨拶をした時、春一はバイク雑誌を読みふけていてそんなもの聞いていなかった。

中学校に入った時、クラス分けの紙を見て春一は喜んだ。丈も琉妃香も同じクラスだったからだ。三人で一緒のクラスになるのは小学校四年生以来だった。三人で一年三組を名乗り、彼らに目を付けた上級生は片っ端から返り討ちに遭った。

そんな楽しい一年が終わり、新しいクラス分けが発表された。今度は三人バラバラで、春一は四組になった。仲の良い人間はいず、不良として位置づけられていた春一は早速クラスの中でも浮いた存在になった。誰も春一の周りに近寄らず、春一も却ってそれを良しとしていた。こういう時は一人の方が楽だ。

「えと、四季、くん？」

「あ？」

突然かけられた声に、春一は顔を上げた。見慣れない顔がある。真っ黒い髪の毛は校則に則った短髪で、人のよさそうな顔はいかにも真面目な優等生という感じだった。対する春一は既に髪を染めてピアスを開けている。学ランのボタンを二つも開けて、腰にはウオレットチェーンを付けている。

「お前、誰？」

「あの、今挨拶したばかりなんだけど。転校してきたんだ」

「ああ、転校生ね」

和仁は春一の前の席に鞆を降ろした。彼が与えられた席は春一の

前らしい。

「和仁っていうんだ、よろしく」

「ああ」

仲良くするつもりもない春一は、敢えて「よろしく」と言わず、目をバイク雑誌に戻した。

休み時間、他のクラスメートたちが春一を避けて談笑に花を咲かせている時、春一はやはりバイク雑誌に目を通していた。すると、和仁が後ろを向いて春一に話しかけた。

「それ、『クラブ・ハーレー』だよ。バイク、好きなの？」

「うん、まあ」

春一は雑誌から目を離さず、形ばかりの答えを返した。

「そうなんだ！オレもバイク好きなんだよ！」

その言葉に春一の垂れ下がった目が少しだけ上を向く。

「ふうん？何が好きなんだよ？」

「やっぱりアメリカンだよな。ゆくゆくはハーレー乗りたいよ」

「わかってんじゃない」

同じ趣味に少しだけ気を良くした春一は、口角を上げて話に応じた。

「ここだけの話」

和仁が声を潜めて周りを見回す。そして誰も注目していないことを確認すると、更に声を潜めて言った。

「オレ、バイク乗ってるんだ」

「マジかよ！？」

その言葉に春一がすかさず反応する。

「何乗ってんだよ？」

「バブ？」

「シブいな」

バブ？とはホンダのホーク？のことで、暴走族にはバブ？の愛称で親しまれているネイキッドバイクだ。そして春一も周りを見回し

て声を潜める。

「実はな、俺も乗ってんだ」

「マジで！？え、単車何よ？」

「FXの直管」

「やべえ！な、な、今日この後走ろうぜ！裏山でさ。あそこって今もう使っていない道なんだろう？」

「おう、行こうぜ」

「改めてよろしく、シュンイチくん！」

「……はるいち」

その夜、春一と和仁は学校の裏山で待ち合わせた。遠くから春一の直管（消音器を無くしたマフラー。爆音）の音が聞こえてくると、和仁もそれに呼応してアクセルを開いた。

「よう、イカスなそのFX」

「お前のバブ？もな」

「ここってケツコーワインディングきついよな？」

「ああ。こいつらで走るには持って来いだぜ」

「んじゃ、行くか」

「おう」

そして春一達は走り出した。先を春一が走り、その後を和仁が追う。二人は車体を倒しながら様々なテクニクを使って走った。

「はーっ！いやー、春一君と走ると楽しいな」

山の頂上で二人は一旦エンジンを切った。辺りを包む静寂が二人の揺れ続けた鼓膜を休める。

「俺も、二人で走るの初めてだから楽しいよ。幼馴染で丈ってやつがいるんだけどさ、そいつは免許取るまで乗らねーって言ってるから」

「そつかー。オレら、悪い子だな」

「ああ。和仁、下り行こうぜ」

「よし来た」

二人はそのまま下りも走り、集合したところで別れた。

そんな日々が一ヶ月ほど続き、春一と和仁はますます仲良くなっていた。和仁は持ち前の人懐っこさで丈達ともすぐに仲良くなり、バイク話に花を咲かせた。

「なあ、ハル、今日も行こうぜ」

「おう」

「ハル、カズ、事故にだけは気い付けろヨ」

「わかってるって。ジョーは心配性だな。オレらなら大丈夫。事故らねーって」

そしてその夜、春一達は例の場所で待ち合わせた。

「よし、んじゃ行くぜ。FXの調子どーよ？」

「ゴキゲンに決まってんだろ。よし、行くぜ！」

この日は勝負をしようということになって、二人は一緒にスタートした。抜きつつ抜かれつつ、二人は爆音を鳴らして猛スピードで走っていた。

そして、カーブに差し掛かった時だった。和仁が後ろからアウトサイドで抜こうと膨れた時、春一の目の前が急に明るくなった。

「！！！」

ゴシャツという嫌な音が後ろでして、春一は急いでバイクを停めた。振り返ると、大きなワゴン車がガードレールにぶつかり止まっていた。その横には、前輪が外れ、クシャグシャの鉄屑となった和仁のホーク？。

「和仁っ！」

ホーク？から少し離れたところには、血まみれの和仁が倒れていた。ヘルメットも被っていないかったため、頭からの出血が多量にあった。頭の周辺には血だまりができていて、手足も変な方向に曲がっている。

「和仁！」

春一が呼びかけるが、返事はない。

「ゲホッ！が……」

最後に一回だけ血を吐いて、和仁はそのまま動かなくなった。念のために春一が胸に耳を当てても、呼応するものはなかった。手首の脈を取っても同じことだ。

春一の声にならない叫びが、山に木霊した。



のちにわかったことは、事故をしたワゴン車の運転手は、乗車前に飲酒をしていたということだ。度の強いウイスキーやスコッチを散々飲んで、車を運転したのだという。だから誰も通らない道を使つて帰つたらしい。それが逆に、この惨事を引き起こしてしまった。勿論春一達にも非はあり、その分相手の罪は軽くなるだろうということだった。春一にもそれ相応の罰が下る。

春一も和仁を亡くしたショックと自分の犯した重大な罪に、ひどく沈痛な思いでいた。和仁の葬式の時、彼の両親は春一のことを許してくれた。それが逆に春一の心を痛ませた。

山の上にある葬儀場から出て、眼下に広がる山々を見た時、春一は己の拳をぐつと握りしめた。

「ハル……」

丈と琉妃香も来ていたが、彼にかける言葉など見つけられず、ただ後ろに控えるだけだった。

「あゝあ」

そんな時、春一達の後ろで男の声がした。少し離れたところで、ワゴン車を運転していた男が黒いネクタイを緩めながらほっと息を吐き出していた。春一達は眼中に入っていないようだ。

「ったく、何だつてこんなことに……。無免の中坊さえいなけりや俺の飲酒運転がばれなかったのによ。くそっ」

唾を地面に吐き捨てた男は、苦いものでも嚙んだような顔をしてそのまま去ろうとした。

「デメエッ！」

その時、春一が男に殴り掛かった。その声に振り向いたところを春一に殴られ、そのまま地面に倒れる。しかし倒れた後も、春一は



男に馬乗りになつて拳を振り下ろした。鼻が砕けても、歯が折れても、拳は留まるところを知らない。

「ふざけんじゃねえ！この野郎っ！」

「ハルッ！」

やっと丈が止めに入つた頃には、男の顔は見るも無残な姿になっていた。丈に取り押さえられて、荒い息を吐き出した春一は、ようやく拳を開いた。

「結局ハルは無免運転とその暴力沙汰で停学を食らつた。勿論それからはバイクも処分したし、事件も起こしてない。だから俺、ハルがもう一度バイクに跨つた時は嬉しかったヨ。アイツは和仁の分も乗るつて言つてた。まあ、ナツちゃん助けに行つた時のノーヘルは勘弁ナ」

悪戯っぽく笑う丈につられて、夏輝も笑つた。

「そんなことがあつたんですね」

「ハルも中学ん時は突っ張つてたかんナ。さあ、ナツちゃん、帰ろうぜ。家でハルを待とう」

「そうですね」

春一は三人と別れた後、和仁が事故をした現場に来ていた。道路の隅に缶ジュースを置く。

「和仁、俺のドラスタいいだろ？もうさすがに直管じゃねーけどよ、こいつもいい音するんだ」

そして春一はアクセルを捻つた。

「じゃあな、また来るよ」

それだけ言い残して、春一はしばしの間友に別れを告げた。

春一が家に帰ると、丈と琉妃香が騒いでいた。

「夏兄ー、ご飯おかわりー！」

「お前、ダイエット中じゃねーのかヨ？」

「夏兄のご飯なら太らないもん」

「どんな理屈だヨ。おーハル、おかえり」

「ただいま」

「夏兄ー」

「今よそつてきますね」

春一は小さく笑って、その団欒の中に加わった。

朝を迎えた四季文房具店には、二人の妖怪が訪れていた。本来ならば営業時間外なのだが、その妖怪というのが以前春一も世話になった呱呱（ここ）という種族の佐伊<sup>さい</sup>だったので、特別に店を開けていた。

妖怪と言っても見た目は人間と変わりなく、どこから見ても父と男の子の親子だった。人間で言ったら小学校一、二年生くらいの男の子はオレンジジュースを飲んでおり、父親の佐伊の方はコーヒを一口飲んで、話を切り出した。

「いや、今日春一さんがいてくれて本当良かったです。えと、紹介します。こいつは俺と同じ呱呱の子供で、名前は福良<sup>ふくら</sup>です。こいつ、小さいから呱呱の群れからはぐれちゃって、俺のところに転がり込んできたんです」

「ふうん。福良、こんにちは」

春一が目線を福良に合わせて挨拶すると、彼は大きな声で「こんにちは！」と返した。元気のいい子供だ。

「それで、春一さんをお願いなんすけど、今日一日、福良を預かってくれませんか？」

「へ？」

「俺も他の同居人もみんな用事があって、こいつ一人になっちゃうんですよ。でもまだ一人にするには心配だし……。お願いします！」  
両手を合わせて懇願する佐伊に、春一は頬をポリポリと搔いて、少し考えていたが、やがて頷いた。

「まあ、他ならぬ佐伊の頼みだし、いいよ」

「ありがとうございます！夜の七時までには引き取りに来るんで、それまでお願いします。適当に遊ばせてやってください」

「うん、わかった。福良、今日はお兄ちゃんと一緒に遊ぼうな？」  
「うん！」

春一は笑顔になって福良の頭を撫でた。実は彼、子供が大好きであり、子煩悩な所もある。

「じゃあ、春一さん、お願いします」

そういつて佐伊は席を立った。

土曜日。多くの人がレジャーや余暇を楽しむ。四季家一行もそれに漏れず、車で動物園に来て楽しい時間を過ごしていた。

「ハル兄、カンガルーだよ！」

「そりやいるだろ。動物園なんだから」

初めての動物園に福良は目を輝かせ、春一はそれを見ながら笑っている。夏輝は荷物持ちとして若干不機嫌な顔を春一に向けた。

「そんな顔すんな。せっかく福良が楽しんでんのに台無しにする気か？」

「そんなことはしません」

「似合ってんぞ、パパ」

笑いを必死に堪えているが、大分漏れている。

「ハル兄！サル！」

「だから、動物園なんだからいるってば。こっから見るとお前もサルみたいだぞ」

「べえー！」

福良は舌を出して他の檻の前に行ってしまった。春一と夏輝は日陰になっっているベンチで腰を落ち着けた。

「困ったな。福良も反抗期か。どうする、パパ？」

「ここぞとばかりに不快な表情をする夏輝に、春一はついに堰を切って笑い始めた。

「馬鹿にしないで下さい」

「そんなつもりはないさ。何だ、やけにばててるな」

「暑いのは苦手なんですよ」

「名前は夏なのに」

「ハルも花粉症に悩まされているでしょう」

「まあ、そうだな。お、福良が何か見つけてきたぞ。目が爛々してる」

「ハル兄！キリンのえさやりできるって！」

「おう、じゃあ行くか。パパはばてたから待ってるってよ」

笑いながら福良の元へ行く春一に、夏輝は言葉を返すのも面倒になつてそのままにしておいた。

キリンとシマウマ、それからダチョウがいる。大きな庭のような檻の中にいて、それぞれ喧嘩することもなく静かにしている。シマウマは草を食べ、ダチョウは昼寝中だ。キリンは檻のギリギリのところまで来て、来園者からえさであるにんじんをもらおうと必死である。カッブに入ったスティック状に切られたにんじんが福良の手にも渡された。

福良は目を輝かせて、キリンにえさをやろうとした。しかし、届かない。キリンの方もがんばって首を下げてくれるのだが、微妙に届かない。周りを見ると、同じくらいの子供たちが父親に抱っこをされて、キリンにえさをやっている。悲しくなつて目を伏せていると、福良の視線が一気に上昇した。

「うわっ！」

「他のヤツラより高いぞ」

悪戯に笑つた春一が下に見える。他の子供達は抱っこなのに、福良だけ肩車だ。

「ハル兄……」

「お前な、キリンは高い所にある葉っぱを食べようとしてあそこまで首が長くなつたんだぞ。それなのにあんなに首を下げさせて、お前が何千年か前に生まれてたらキリンは今この姿じゃないかもしれないぞ」

「よくわかんないよ……」

「パパよりは低いけど我慢しろよ」

「パパ？」

訳があまりわからない福良を余所に、春一はひとりでケラケラ笑っている。何のことかと思ったが、考える間もなくキリンの顔が福良の前に迫った。

「わっ！恐い！」

「あんな・・・」

呆れて物も言えない春一が、福良のカップからにんじんを一本とってキリンに食べさせた。

「よく見てみる、こいつも結構チャーミングだぞ。俺がキリンなら即プロポーズするね」

「チャーミングって・・・でも、かわいい、かも」

「だろ？みんな愛嬌ある顔してんじゃん。ほら、もつと欲しいってよ」

「舌長い！」

初めてえさをやった福良が驚いて手を引っ込めた。

「意外とな。楽しいか？」

「うん！」

楽しさが溢れてやまならない福良の台詞がおかしくて、春一は小さく笑った。

「もうないよっ」

福良がにんじんを全部やっても、キリンは傍を離れようとしなかった。えさは一人一個だけだから、何もやれない。

「福良が気に入ったんだろ。恋敵出現だな」

「ええっ、でも、もうえさないよ」

「また来りゃいいさ」

当たり前のように言われたその言葉に、福良は喜びを噛み締めた。

「おい、福良！」

キリンに「また来るからね」と声をかけて夏輝のいるベンチに戻ろうとした春一が、声を上げた。肩車をされたままだったため、少しバランスを崩した。

「何？」

「パパがナンパしてるぞ。スクープゲットだ」

春一がニヤニヤしている視線の先を見ると、夏輝と若い女性が並んで座っている。仲良く話をしているようだ。

「な、なんば？」

「ついに夏にも春が来たか」

「？ハル兄ならここにいるのに」

春一は福良を乗せたまま隣の檻に行つて、さりげなく夏輝を監視した。

「夏兄のところに行かないの？」

「せっかく姫君と会えたんだ、エキストラは脇にそれようぜ。ほら福良、ホワイトタイガーだぞ」

「恐いっ！トラなのに白いつ！」

「だからホワイトタイガーって言うんだよ」

溜息混じりに福良に説明しながら、夏輝をちらりと見る。彼のあの顔は見たことがない。異性にだけ見せる顔だろうか。

「ハル兄、カメラ！」

福良に促されて、春一はケースからカメラを出した。

「ホラよ。ああ、檻の外から撮るとダメなんだよ。柵と柵の間にレンズを入れて、そうすれば柵が入らないだろ？」

「ほんとだ！」

福良にデジタルカメラの操作を教えて、写真を撮らせる。

（俺の頃は使い捨てのフィルムカメラだったのによー。しかも動物園で売ってるやつ。二十四枚しか撮れなかった頃とは変わったねー）

なんてことを考えながら、檻の中の動物達を見る。一気に自分が老け込んだかのような。

「泣けてくるねー」

「ハル兄でも泣くの？」

あまりの衝撃に福良がカメラを落としそうになる。

「俺は毎晩枕を濡らしてるよ？俺のハートはプレパレートなんだ」  
「プレパレートって何？」



「やめた。今の小学生にはガラスのハートなんて言葉まで年寄り扱いされそうだ」

福良は春一の独り言に頭を捻っていたが、隣の檻にいる動物を見てそれらが一気に吹き飛んだ。

「チーターだ！」

「競争して来いよ」

「食べられちゃうよっ！」

春一がチーターの前に移動する。他の檻よりも大きめに作られているものの、チーターにしてみたら何も意味を成さないだろう。その証拠か、チーターは屋根の日陰で横になって寝ていた。

「寝てる……」

「いい寝顔だな。向かいにいるゾウは眠気より食い気だけど」  
「ゾウ！？」

福良が勢いよく後ろに振り返る。頭を持たれている春一は首が百八十度回転するかと思った。

「この……」

「ゾウだー！」

子供の興味というのは素直で純粋なものである。春一は怒る気もうせて、ゾウの檻に移動した。ここで飼われているのはアジアゾウで、耳も小さめだ。

「鼻が長い」

「だからゾウだと判断できるんだよ。こいつがただの鼻してたらサイだ」

「ハル兄、キリンって高い所にあるものを食べたかったんでしょ？じゃあゾウは低い所にあるものを食べたかったってこと？」

「さあ、埃掃除でもしたかったんじゃないか？」

「適当言ってるでしょ」

「……対応が夏に似てるな」

「誤魔化さないでよー」

バシバシと頭を叩く福良に、春一は一度福良を落とすフリをして、

それをやめさせた。

「恐いよ！落ちるかと思った……」

「人の頭叩くからだよ。中国の言葉にあるんだ。『人の頭を叩く者乗るべからず』」

「絶対嘘だ……」

「福良、ゾウがメシ食ってるぞ」

「りんご食べてる！」

大きなりんごを鼻で持って、口に運ぶ。とてもおいしそうに食べるゾウである。

「おお、いい食いつぶりだな、数子」

「数子？」

「ゾウの名前だよ。数珠市のゾウだから数子ってんだ」

「そのまんま……。ハル兄がつけたの？」

「んなわけあるか！俺がちびの時から数子なんだよ」

「へえ」

すると、福良の腹の虫が鳴った。子供は至って素直である。

「はっはっは、そろそろ夏のトコに戻るか。メシだ」

「ボク、おにぎり作ったんだよ！」

「中身は？」

「昆布！」

「うまそうだ」

春一は笑って、夏輝のところに戻った。

夏輝のところに戻ると、ちょうど件の女性が席を去るところだった。

「ほう、こりゃフラれたな」

あららと言う春一の意図がよくわからず、福良は夏輝に声をかけた。夏輝はちよつとびくりして、こちらに手を振り返した。

「きりんにあさあげたんだよ」

「良かったね、福良」

頭を撫ぜる夏輝の横で、福良が今までのことを話して聞かせている。春一は弁当を出して、さつそくおにぎりを口に入れている。

「一杯どうつすか、お父さん」

語尾に音符がついた口調で春一がお茶を入った紙コップを夏輝に渡す。

「……見てたんですか？」

「お前がああいう女タイプだとはな」

「違いますよ！」

春一の手からお茶をひったくって、一口飲む。夏輝が動揺するのも珍しいので、春一が更に面白そうな顔をする。

「大学の友人です。彼女はバイオリニストで、カルテットで一緒になったことがあるんですよ。まさかここで会うとは思わなかったの、驚きました」

「お前チェリストだもんな。んで、お前と悠長に話していられるってことは、旦那と来たってわけじゃねーんだ？」

「彼女、未亡人なんですよ。私よりも二つ年上で、昨年旦那さんを事故で亡くしているんです。息子は三歳になるんですが、今日は彼女の母親と来ているらしいです」

「年上趣味だったのか」

「だから！違いますよ。福良の前で変な言葉を使わないで下さい」

「さっき『ナンパ』って教えたぞ。あと『人の頭を叩く者乗るべからず』」

「そういう言葉を教えないで下さい。ハル二世にしないでください」  
「大丈夫だ。今のところお前に似てる」

こんな所を似せては大変だと、夏輝はひそかに嘆息した。その嘆息の隙間を縫って春一の鋭い質問が刺さる。

「で、何を相談されたんだ」

「……わかってましたか」

「当たり前だろ。旦那の事故関連か？」

「はい。調べてほしいと」

「とりあえず、メシを食ってからでも遅くないんだろうな？」

ふれあい広場と名付けられたそこは、ウサギや羊を放し飼いにしている自由に触ることができる。何匹ものウサギが行き交い、羊が鳴く。福良はウサギを追いかけたり羊の毛を触ったりして楽しんでいる。その傍らで夏の暑さにばてた男が二人、ベンチに腰掛けていた。

「おい、何でこのベンチは屋根がついてないんだ？」

「設計者に問い合わせてください」

「くそー、向かいのゲージにいるフラミンゴに腹立ってきた」

「それはフラミンゴが不憫すぎます」

夏の暑さもなんのその、福良は無邪気にこつちを向いて手を振っている。ウサギを捕まえて、そのウサギの前足を持って手(?)を振らせる。二人はそれに手を振り返して、何年前かの自分の姿に重ねる。

「でー、王女は何を調査して欲しいって？プリンス夏輝」

「そういう冗談はやめてください。・・・・彼女、名を岸瀬さんと言います。彼女は、あの事故が妖によって操作されたものではないかと思っていますようです」

「ふうん？」

「車を運転していたのは旦那さんで、彼女と息子さんは後部座席に座っていました。山道でカーブを曲がりきれずにガードレールに衝突、転落は免れたんですが、その時の衝撃で旦那さんは首を折られて・・・・。岸瀬さんは息子さんをしっかりと抱いていたので息子さんに怪我はなく、岸瀬さんも助手席に体をぶつける格好だったので、軽傷で済みました。彼女曰く、そのカーブを曲がる時に、旦那さんが叫んだらしいのです。『ハンドルが効かない！』と」

「それで妖怪だと？」

「事故直後に、見たそうです。山に登っていく人影を。それは蛙のように木々を飛び越え、瞬く間にいなくなったとか」

「怪しいねえ」

「その調査をお願いしたいと頼まれました。もう時間も経っていますが、先輩の頼みなのであまり無下にできなくて」

「夏の色恋沙汰をからかってる場合じゃないらしい。本格的に乗り出すか」

「色恋沙汰ではありません」

キツパリという夏輝に、春一は「つまらん」と一言で切り捨てて、目の前に居を構えている羊の毛をつまんだ。

「この毛でかつら作ればみんなモーツァルトだな」

「冗談を言っている場合ではないと今言ったばかりです」

「お堅いやつめ。折角福良が楽しんだ。もうちょいいいようぜ。」

お前だつて二十年前はあんな感じだったろ？」

「まあ……」

自分が六歳の頃。正直あまり覚えていないが、自分にも福良のような無邪気な時期があつたのは確かだ。

「よし、とりあえずその場所を教えろ。そしたら、調査開始だ」

春一は事故現場に来ていた。数珠市内の森で、この山を越えれば隣の市になる。山道は急カーブをしており、ガードレールには事故の痕跡がありありと残っていた。

車の往来があるので、バイクは路肩に避けて停めている。水のペットボトルを半分くらいまで飲んで、そこに花を挿す。線香は道に置く。手を合わせ黙祷すると、早速辺りを見渡す。

妖怪にも棲みかがあり、それは春一の頭に分布図としてインプットされている。蛙のような姿といったら思い浮かぶのもいるが、いかんせんここから遠い。何のためにここまで来るのかその理由がわからない。一応来る時にその妖怪に会ってきたが、何も知らないと言う。

目を閉じて気配を探る。妖怪の気配はある。右手、木々が茂っている方、近い。

春一は目を開けて木々を凝視した。そこに動く気配がある。

「おい！お前、来いよ」

突然話しかけられた妖怪はびっくりと震え上がって、いそいそと春一の方へやってくる。見た目は人間と何も変わらない、寧ろ妖怪なのか疑いたくなる容貌だ。この山に棲む「奴<sup>やつこ</sup>」という。

「何であんなうろつろしてた？」

「いや、こんな時期にお参りに来るやつは少ないから気になって」  
奴の見た目男は、いまだおどおどしながらそう言った。

「いつなら多い？」

「お盆の時期は仏さんのかみさんと息子が来るよ。あと母親も来るかな。それと命日だ。二ヶ月くらい前になる。あんだ、何者だ？」

「俺は春一。妖怪の万屋をやってる」

「ああ、あんたが春一か。仲間が世話になつたと言っていた」

「奴は二回くらい世話してる。なあ、その時の事故の様子がわかるやつ知らないか？」

「さあ、もう時間が経っているからね」

「お前達の間で話題になつたりしなかったのか？」

「一応なつたよ。自分たちの土地で人が死なれたらそりや気分はいいとは言えない。でも、みんな言つてたのは、奇跡だ、ってことかな」

「奇跡？」

「ほら、ここ急カーブだろ？ だから、普通ならあのままガードレールを突き破つて谷底に落ちるところを、あの車はギリギリで踏ん張つてた。カーブが曲がりきれないと判断して急ブレーキ急ハンドルをかけていたら間に合わないと思うんだけど」

「ふーん」

そう言つて春一はガードレールに目をやった。傷が生々しく事故の凄まじさを語る。

「すごい傷だね」

「そりやすごい事故だつたからな。奥さんと息子が後部座席に乗つてたのも不幸中の幸運なのかもしれない。助手席に乗つてたら確実にぺちゃんこだったからな」

「そつか。そんなにすごい事故だつたんだ」

「だからガードレールを突き破らなかつたのは奇跡だと言ってる」

「有益な話をありがとう。困つてることがあつたらいつでも相談に乗るから」

「ありがとう、また寄らせてもらつよ。まあ、寄る用事がないのが一番だけだな」

春一はそれに「そうだね」と言つてそこを去つた。



春一が家に帰ってくると、もう夕方になっていた。夕ご飯の香りが鼻をくすぐる。

「ハル兄、すごいよ！珍しいでしょ、ダチヨウのお肉！」

福良が目を輝かせて焼けた肉を春一に見せる。牛肉のような肉が、目の前に出される。

「お前さ、さつきダチヨウ見ただろ」

子供というのは時に残酷であり、本人はその残酷さを知らない。

「一応夕飯は他に作ってますから。これは福良がどうしても言うので追加で買っただけです」

夏輝が本当の夕飯を指差しながら言う。春一は一安心してダチヨウの肉を食べる福良を見た。

「ワニは鶏肉みたいだぞ」

「ハル兄食べたことあるの！？」

「あれは結構うまい。ダチヨウは固いけどな」

「そんなのどこで食べたの……」

「魔法の国」

春一はソファに荷物を下ろして、椅子に腰掛けた。答えをはぐらかされた福良が魔法の国を一人で想像している。

「またそうやって変な入れ知恵をしないで下さい」

「役に立つんだぞ」

「どこで？」

「合コン」

はあと溜息をつく夏輝の手から夕飯の皿を奪ってつまみ食いを済ませた春一はバッグの荷物の中から取り出したデジタルカメラをパソコンにつなげた。

「夏、今回のことは、お前が話すかどうか判断してくれ」

「……訳は？」

春一は事故現場のガードレールを撮った写真をプリントすると、夏輝に渡した。

「彼女、蛙みたいって言ってただろ？ あの辺りで蛙と言ったら『式紀<sup>にき</sup>』だ。あの事故に関わっているのは式紀の子供だった。子供と言っても式紀は種類上とても筋力が強いから、大人と言っても相違はない。けどな、やっぱり子供なんだ」

「詳しく聞かせてください」

春一は現場写真を何枚か見比べながら言った。

「まず、旦那さんが言った『ハンドルが効かない』ってというのが引っかけたんだ。妖怪は現実存在するものだから、ハンドルを効かなくさせるには、物理的な作用が必要だ。そしてこのガードレールの痕。ほら、ここで不自然に切れてるだろ？ こっちが普通の事故の写真。こっちが件の写真だ。明らかに短い。衝突した所のへこみは同じなのに、引き摺った線が極端に違う」

春一は普通の事故の写真もプリントアウトし、二枚の写真を夏輝に渡して指摘した。

「周りの妖怪たちが言ってたそうさ。『これは奇跡だ』ってな。普通なら、このまま谷底に転落らしい。だろうな。首を折るくらいの衝撃だ。けど、この車は道路に残れた」

「まさか……」

「式紀の子供が、たまたま事故現場にいたんだ。そして、ガードレールに突進した車を見た。あいつらの筋力は桁外れだ。見た瞬間に地を蹴って車の前に出れただろう。そこで、車と真っ向から対決した。式紀の子供は、車を落とさないように必死に押し留めた。ハンドルが効かなかったのは、式紀の子供が車を押し戻す力でハンドルが意味を成さなくなったから。そして、車はギリギリで止まった。その子供が救った。けど、子供は後でその運転手が死んだことを知った。シヨックだったろう、自分がもつと策を考えていれば、と。」

だからその子供は言い出すことができなかった。ずっと、自分の中に留めていた。そいつのおかげで命が二つも救われているとは知らずに」

「本当ですか……？」

「その子供が申し出てくれたんだ。遺族からの依頼だと言うと、声を振り絞って話してくれた。この写真が証拠になるだろう。けど、依頼主は妖怪のせいで事故になったと思っているようだから、説得は難しいかもしれない。式紀の子供を責めるかもしれない。だから判断はお前に任せる」

夏輝は写真を手に、思いを巡らせた。

「福良、メシだ」

「えっ？」

春一が福良の口にむりやりブロッコリーを詰めた。福良は必死にもがいているが、春一が肩を組んだ状態でいるため身動きできない。春一はそうしている中で夏輝を見た。いつになく真剣な顔で、写真を見ている。一回目を閉じて、そして開く。

それを見て春一は、誰にも気付かれないように口元を緩めた。

「福良、パパがワイン飲ましてくれるってよ」

「誰もそんなこと言ってますん！」

「ワインっておいしいんですか？」

「まあ、口ゼなら飲みやすいな。赤はお前にはまだ早い」  
「ハル！」

夏輝はこの後電話をかけるのだが、用件を話し終えた後に春一が盗み聞きをしているのがわかってまた苦勞したのは後日談。

プルルルルル プルルルルル

四季家の電話が鳴る。春一は一階の文房具店にある応接スペースで大学の課題をこなしていた。夏輝はたまに来る文房具店の客の相手をしており、手が離せない。春一はソファから立ち上がってカウンターのある受話器を取った。

「もしもし？」

『おう、春一か？』

「うっわ、最悪。おやつさんから電話とかマジでナイ」

『うるせえ！』

電話の主は、数珠市一带を取り締まる数珠警察署の少年課に所属する藤という刑事だった。彼は春一や丈と面識があり、以前は藤から頼まれた依頼を片付けたこともある。そんな彼から電話がかかってくることは稀だった。

『なあ、春一、メシ食いに行かねえか？』

「おやつさんとデートお？最悪。ヤツベ、鳥肌立ってきたよ。俺いくら金積まれてもそれだけは嫌だからね」

『お前とデートなんてこっちから願い下げだ！丈と琉妃香も一緒だよ！』

「また俺ら使ってなんかしょって企んでんの？」

訝しげに春一が聞くと、藤は「うっ」と声を詰まらせた。どうやら本当にその通りらしい。

『と、とりあえず、昼の十二時に迎え行くからな！』

「おやつさんの迎えとかマジ気が滅入るけど、まあ待ってるよ」

春一が言っと、藤は電話をガチャンと切った。恐らく受話器を叩きつけるようにして置いたのだろっ。その光景が目には浮かぶ。

「おやつさーん……」

「いやいや、今までおやつさんのこと見下してたけどさ、マジであり得ねーワ」

「おやつさん、乙女心って言葉知ってる？」

「メシおごつてもらうんだから文句言っくんじゃねえ！それと丈、見下してたと言っな！」

「あ、大丈夫。現在進行形で見下してるから」

テーブルで三人がそれぞれ不平を並べる。藤が三人を連れてきたのは他でもない、数珠署だった。彼としてはここの食堂で昼ご飯をおごろうという腹だったらしい。しかしブーイングの嵐。

「あのさー、もうちょつとマシな選択肢なかったわけ？」

「つーか、おごりで署の食堂来るぐらいなら自腹切って普通の店行くヨ」

「女の子を招待するのにレストランの予約も取れないなんて、ダメな男」

三重のため息が藤に浴びせられる。

「うつせえ！お前ら逮捕すんぞ！」

「職権濫用とか最悪。おやつさんが逮捕されちゃうよ？」

「寧ろ逮捕されたらどーヨ？」

「あたし達が証人になろうか？」

「あのー……ご注文は……？」

店員が困った様子で控えめに声をかける。この会話の合間にどうやって入っていきばいいのかわからない。

「あ、じゃあ俺刺身定食」

「俺ハンバーグ定食お願いしまース」

「あたしオムライス」

「頼むのかよっ！」

藤が机を手でバンと叩く。慣れている三人はやはり溜息を吐き出すのだが、店員はびくりと体を震わせている。

「すみませんね、お姉さん。この人粗暴なんで」

「慰謝料請求してもいいすヨ」

「あたしたち味方ですからね」

藤はふんつと鼻を鳴らして煙草のフィルターを噛んだ。ライターを探すためにポケットの中をひっくり返す。

「あの、ここ禁煙なんです……」

「あ」

先ほども言いにくそうに言った店員の言葉に、藤は周りを見回した。壁に「禁煙にご協力お願いします」というポスターが貼られている。それを見て三人が爆笑する。

「おやつさんって本当残念な男だね！」

「マジでおもしろいワァー」

「腹筋限界」

「俺ざるそば！」

怒鳴るように藤が言つと、店員は伝票に記入する前にテーブルから逃げるように離れた。

「で、用件は何なの？」

食後のコーヒーを飲みながら春一が藤に問うた。藤は煙草の箱を出しかけて、そのまましまった。

「この署の周りで、最近器物損壊事件が多発してるんだよ。その事件を起こしてる妖怪を、お前らの手で捕まえてほしいんだ」

「何だって妖怪ってわかんたヨ？」

「それはな……」

藤は、通報を受けて事件現場に来ていた。近頃数珠市で起きる器物損壊事件。目撃情報から犯人は高校生くらいの男だということで、藤はその男を追っていた。店の看板やガラスなどを壊し、すぐに消える男。悪戯にしては度が過ぎており、市内の商店は困り果てていた。

藤が来た事件現場は、数珠市からさほど遠くない場所にある一つのラーメン屋。店のガラスが割られ、更に店の前に出していた看板も無残に壊されていた。

「まったく、最近のガキどもは……」

藤は煙草のフィルターを噛んで、ライターで火をつけた。苦い煙が口の中に広がる。

「今はまだ器物損壊で済んでるが、これが人間に向かったら……」  
そう考えると、背筋に寒気が走った。一刻も早く逮捕するしかない。

「ん？」

そんな藤の視界の片隅に、ちらりと人影が映った。一瞬しか見えなかったが、まだ若い男に見えた。

「まさか……」

犯人でないにしても、今はもう夜の十二時過ぎ。数珠市では十八歳未満が夜の十一時以降に出歩くことを禁止している。注意をしてやろうと藤が路地に入ると、前を先ほどの男が歩いていた。服装は黒いジャージで、髪型や身長も目撃情報と一致する。

「おい、ちよつと待て」

声をかけると、男は急に走り出した。後ろも振り返らずに、ただ走る。出遅れた藤は、言うことが聞かない体に鞭を打って、全力疾走で男を追いかけた。

「待てつつつてんだろ！」

藤が叫ぶと、男は右の道にそれた。藤はしめたと思った。その道の先は行き止まりになっている。後ろ左右を壁に囲まれて、乗り越えられない高さだ。追いつめた。

藤が路地を曲がると、男は思った通り追いつめられていた。藤がやつとのことで足を止めると、男は少しだけ横顔を見せて、ニイと笑った。その笑い顔が不気味で、藤はさっさと捕まえようと足を踏み出した。その刹那

「うわっ！」

激しい光が藤の目の前に広がった。目の前を光が覆っていつて、目を開いているのに真っ暗になる。ただでさえ夜の暗いところにいて、目が暗闇に慣れているところに強烈な光を受けた目は、しばしの間自由が利かなかった。

「くそっ！」

しかしここは人一人が通れる道だ。もし自分の脇をすり抜けようとしたら、それはわかる。そこで藤は敢えてバタつかず、そのまま待った。段々目が慣れてくると、藤は信じられないものを目にした。男が、消えていた。

「だから、犯人は発光できて、突然消えることのできる妖怪だ。そうでなきゃ俺は幽霊でも追ってたことになる」



神妙な顔をして藤が言うと、三人はふむ、と考えた。そして一拍の間をおいて春一が口を開く。

「まあ、捜査は足から、だよな？」

三人は藤が犯人らしき男を見失った例の路地に来ていた。なんてことはない、三方を無機質なコンクリートの壁に覆われたただの行き止まりである。電柱もなければ雑草もない、そんなただの路地だった。壁の高さは二メートル以上あり、身長が百七十七センチある春一でも乗り越えるのは困難だった。

「おやつさん、本当はすり抜けられたんじゃないの？」

「いや、あの時は走ってくる音もしなかったし、風も感じなかった。犯人は消失したんだ」

「うーん……」

「何だ春一、おかしいところでもあんのか？」

「いやね、おやつさん。妖怪ってのは人間と大差はない生き物なんだよ。基本的な構造は人間と同じだ。相手が幽霊ってんならともかく、人間がこの壁を乗り越えたりいきなり消えてなくなることはできないでしょ？妖怪もそれに漏れない。だからおかしいんだ」

「まあ、霧化できる妖怪もいるにはいるんだけどヨ、そいつは発光なんてできないし、何しろ外国の妖怪だからナ。日本にはいねえヨ」

「外国から来たのかもしれないねーだろうが。霧になれるならパスポートもいらねえだろうし」

「霧になれる時間は決まってるの。それに、枢要院の許可もいるしね」

「すーよーいん？ってなんだっけか」

琉妃香の言葉に、藤が首をかしげる。聞きなれない言葉だ。すると、例の如く三重のため息が藤に向けられた。

「妖怪世界の警察みたいなもんだよ。妖怪の秩序を守ってる奴ら。前に説明したのに、おやつさん本当に頭悪いね」

「人を馬鹿扱いすんな！」

「劣等生扱いしてんの」

「このヤロウ」

腕を振り上げる藤を春一はそそくさと無視して、地面を調べ始めた。全く相手にされない藤は振り上げた腕を持て余して、そのまま壁を殴った。骨に響く痛みが神経を支配した。

「おやつさん、何やってんノ？」

「さすが数珠市が生んだ劣等生。あたしたちには真似できないよ」

「俺仕事があるから帰るぞ！」

「うわ、依頼しといて自分だけ帰るとかマジ非常識」

「まさか人道も踏み外してるとはネ」

「おやつさんサイテー」

「じゃあ後頼んだからな！」

藤はそれだけ叫ぶと、近くに停めてあった車に乗って署へと帰った。

「つたく、これおやつさんじゃなかったら依頼料三倍増しだぜ？」

「おやつさんはホントしょうがねーナ」

「後でなんかおごらせよつか」

「「さんせー」」

春一と丈の声が重なったところで、琉妃香が何かに気付いた。

「ねえ、これなんだろ？」

彼女が指差すのは、壁に向かって右隅の一角。春一と丈が琉妃香の指の先を覗き込むと、そこには斜め一直線に並んだ砂利があった。まるで箒で集めた埃を塵取りで取りそびれたみたいに、砂利が並んでいる。

「琉妃香、こりゃあもしかしたら大発見かもしれねえぞ」

「え、マジで？」

「ハル、何かわかったの力？」

「俺、わかつちやったかもしんねーわ。ちょっと実験手伝って」



夜、辺りはしんと静まり返っていた。数珠市内にある商店街。大きなショッピングモールもある数珠市だが、古くから市民に愛されている商店街は廃れることなく存在していた。

そんな商店街の一角にある小さな古本屋。老齢の男性が一人で切り盛りをしていて、彼の人柄ゆえに小さいながらもそれなりに繁盛していた。本屋にシャッターはなく、ガラス窓からは中にある膨大な数の蔵書がうかがえる。そのガラス窓に、人影が映る。

その人影は、手にした角材をそつと音もなく振りかぶった。そしてそれを振り下ろそうとした刹那、彼の耳に怒号が響いた。

「何やってんだコラア！」

振りかぶった手を空中で止め、人影の男は声のした方を見た。茶髪に銀色のメッシュを入れた一人の不良が、彼の方を睨んで立っていた。

「やつほー、おやつさん」

春一が琉妃香の助言で何かを気付いた後、三人は数珠署に来ていた。藤に会ったためだ。三人が許可もなく少年課へずかずかと踏み入ると、藤が椅子にふんぞり返って書類をだるそうに見ていた。

「何だ、いきなり。自首する気になったか？」

「いやだな、おやつさん。そんな冗談は笑えないよ。大事な話があるんだ」

藤はいつもと違う雰囲気の人々を応接スペースに案内した。三人は顔見知りの他の刑事に挨拶をしながら、ソファに座った。

「で、用件は何だ？何か分かったことがあるのか？」

「まあね。まず、犯人が犯行を起こしている場所は数珠市内。それ

はそうなんだけど、改めてよく見てみると、少し偏りがある」

「偏り？」

「これ見て」

春一がテーブルの上に出したのは数珠市内の地図だった。南北に長い数珠市の南側、ちょうど数珠署がある西側に赤い点がいくつも描かれている。

「これ、犯行現場を赤い点で印した地図。これ見ると分かるんだけど、犯行はあくまでもこの署の西側の半径一キロ以内でしか行われていないんだよ」

そう言つて春一は半径一キロの円を地図に書き込んだ。

「言われてみりゃそうだな」

「だから、この円の中にパトロールを集中してほしい。勿論俺らも独自にパトロールするけど、如何せん人数が足りないからね。おやつさん達も協力して」

ちょうど春一が見回りをしていた時、一人の男が本屋の前で角材を振りかぶっていた。春一はとっさに叫び、男を確保しようと走りだした。しかし犯人が素直に捕まるわけではない。男は角材を投げ捨て、走つて逃げた。それを春一が追う。差は一定を保ったまま、男は路地をぐるぐると回つて逃げた。しかし春一も長年住み慣れた土地だけあつて、一切迷わずに男を追いかける。

そして男はしばらく行つたところで右に折れた。藤が男を見失つたのと同じ場所だ。春一は藤がそうしたように男を追いつめた。荒く乱れた息を整えながら、春一は男に近づいた。

「……」

その時、何もしていないのに男がうろたえた。身動きを取れないままおろおろしている。

「サンキュー、ジョー」

春一は後ろに向かつて声をかけた。そこには、巨大なライトを持つてひどく怯えた顔をしている男と肩を組んでいる丈がいた。

「なーに、軽い軽い」

丈は何でもないように言って、男から肩を離れた。

「さーで、可愛げねーお遊びはおしまいだぜ？ヤンチャ坊主よお」

春一が逃げ場をなくした目の前の男に脅しの言葉をかける。

「く、くそっ！」

目の前の男は春一に殴り掛かった。しかし、いとも簡単に拳を躲かれ、そのまま春一渾身の頭突きを食らってその場に倒れた。

「オイ、お仲間倒れちゃったぜ？お前どうすんのヨ？」

丈が笑顔で隣にいる男に話しかける。相手は引きつった顔の筋肉を一生懸命に動かして、謝罪の言葉を並べた。

「す、すみません。あの、許して……くださいっ！本当すみませんでしたあっ！」

「あのネ、そういうのは警察で言うもんだヨ？」

仲間の男はニコツと笑った丈に頭突きされ、犯人の二人は仲良く一緒に地に沈んだ。

「協力ご苦労様。後日署長から表彰あると思うが、どうする？」

春一から連絡を受けた藤が現場に着くと、そこには倒れ伏している二人の男と春一、丈がいた。何かと問いただすと、倒れている二人が犯人で、事件は解決したという。藤はとりあえず犯人の男たちをパトカーに乗せて、春一達に向き直った。

「やめてよおやっさん。手柄はおやっさんにあげる」

「そうそう、俺らには表彰なんてかつたるいだけだつてノ」

「まあ、そういうと思っただぜ。でも、すーなんとかってところじゃなく俺に引き渡すつてことは、奴らは人間なんだな？」

「そういうこつた」

「でもわかんねえな、種は何なんだ？確かにあの時、俺の目の前から消えたんだ。それに犯人は一人じゃねえし……ったく、これじゃ俺が馬鹿みてえじゃねえか」

頭をぼりぼりと搔きながら言う藤に、二人は顔を見合わせて爆笑した。

「あつはつは、おやっさんは馬鹿『みたい』じゃなくて、正真正銘の馬鹿だつて！」

「もーおやっさん、俺らの腹筋どうするつもりヨ？」

「っせえ！」

ここに琉妃香がいなくて本当に良かったと思う。彼女がいれば破壊力は二倍増しだ。

「種明かしするとね、奴らは二人一組で鏡を使ったトリックを用いたんだ」

「鏡？」

「琉妃香が気づいたんだけどね、その角には砂利が一直線になっ



て並んでたんだ」

そう言つて春一は右隅を差した。藤が見に行つてみると、成程確かに細かい砂利が一直線になっている。

「それで気付いた。おやつさんが追いつめた時、犯人の内一人はおやつさんの後ろから気づかれないうちに照明で光を当てた。それがもう一人の近くにあつた、姿見の枠を外した鏡に反射して目くらましのフラッシュになった」

「そりゃあわかつたけどよ……消えたのは何でだ？」

「おやつさんまだわかんないの？あのねえ、そのフラッシュにおやつさんが視覚をやられてる時に、後ろの犯人は逃げて、追いつめた犯人の方は鏡を盾にしたんだ。その角に自分の身を潜めて、角と対角になるように鏡を置いた。すると、鏡は壁を映しておやつさんの前から消えたように錯覚する。夜の、増して街灯もないようなこんな路地だからこそできることだよ。だから犯人はいつも同じような所で事件を起こして、同じところに逃げ込んでたんだ」

「成程なあ……」

うーんと唸る藤の頭をポンポンと叩いて、春一はニコリと笑つた。藤が手を叩こうと払いのけた時には、春一の手はそこになかつた。

「おやつさん、言いくいんだけど、禿げた？」

「うるせえ！お前らのせいだ馬鹿野郎！」

「うわ、責任転嫁」

「ダメな男だネー」

その後も藤は喚き散らしたが、警官がパトカーを出すというので渋々それに乗つて署に戻つた。

その後連続器物損壊事件はなくなり、数珠市には平和が戻つた。

……のだが、藤と春一達のこの時のやり取りを丈が琉妃香に全部ばらしたため、藤はしばらく嘲笑の対象になつた、というのはまた別の話。



ここ数珠市には一つの球場がある。運動公園の中に位置する数珠球場は、小さくはあるものの、プロ野球の試合が時々行われる場所だった。地元チームのホームスタジアムは市外にあるものの、数珠球場でもよくホームゲームが行われていた。

「降りそうだな、兄ちゃん」

「そうっすね。持つてくれるといいんですけど」

春一は数珠球場に来ていた。春一が応援する地元野球チームのゲームを見に来たのだ。彼は野球とサッカーにそれぞれ覇のチームを持ち、中でも地元のチームを応援していた。今回は野球の試合を見に来た。今にも雨が降り出しそうな空は、観客の心を不安で曇らせた。隣にいた男に話しかけられた春一は、そんな空を見上げて難しい顔をしていた。雨の日の野球観戦は本当に辛い。

内野のバックスタンド裏ならば屋根があるものの、春一達のように本格的な応援を行う者は外野にいる。雨が降ればさらされるわけだ。増して今日は昼が晴れていたため、傘は持つてきていない。ずぶ濡れになること間違いなしだ。

試合はシーソーゲームとなった。一回の表に先制アーチを許したが、その裏にすぐさま一本のホームランとタイムリーで逆転。しかし二回の表にまたもや二点タイムリーを打たれた。その後一度は三点差をつけた春一覇のチームだが、五回裏終了時点で同点に追いつかれていた。

雨が降り始めたのは三回表が終わって裏に入ろうかとしていたところだった。いきなり激しい雨が降り、あっという間にグラウンドや客道を濡らした。

そして五回裏終了時点で雨はいよいよ激しくなり、試合は中断となった。春一始め外野の客達は全身ずぶ濡れで、タオルでさえも濡れて使い物にならなくなっていた。

「こりゃーゲームセットかもなあ」

「そうですね。最悪の天気っすよ」

またもや隣にいたおじさんと話していた春一は、しばらくこの雨がやみそうにないのでトイレに行くことにした。せめて下に着ているシャツを脱いでユニフォームだけになれば、この服がまとわりつく嫌な感触からは逃れられる。着替えながら雨宿りをしようと考えていた。

すぐ近くのトイレは混んでいたので、少し遠くの空いているトイレに入った。春一が着替えを終えてドアを開けようとしたとき、突然短い悲鳴が聞こえた。

「ぐあっ！」

春一が急いでドアを開けると、そこには頭を血で染めた若い男が一人、倒れていた。近くにいた別の男が急いで被害者の男を介抱したのを見届けて、春一は逃げた犯人を追った。

トイレから出ると、犯人は左、レフトスタンドの方へ逃げて行った。背格好は春一と似ているが、相手チームのユニフォームを着ていた。春一は懸命に追いかけたものの差は一定のまま縮まらず、犯人はスタンドに入り、人ごみに紛れてしまった。

「くそっ」

相手チームのユニフォームを着ているため、スタンドの中を探るのは至難の業だった。探している間に他の通路から逃げられたらおしまいだった。春一は舌打ちをして、犯行現場であるトイレへと戻った。

トイレには警備員と被害者の男、そして介抱をしていた男がいた。周りの人垣をかき分けて進むと、介抱をしていた男が春一を見て呼びかけたため、現場の中に入ることができた。被害者の男は頭から血を流していたものの、意識ははっきりとしていて、今は上体を起こして座っていた。

「大丈夫ですか？」

春一が被害者の男に話しかけると、男は顔を歪めながらも頷いた。「はい。突然だったんで、びっくりしました」

「何が原因だったんですか？」

「それが、わかんないんですよ。俺が普通にトイレの前に立ったら、いきなり殴られて。相手チームの奴だったから、気に食わないのかとも思ったんですけど、でも試合はどっちかっていうとあいつらの方がおもしろいだろうし…… 本当、訳わかんねえよ」

そう言って、被害者の男は首を捻った。彼はその後、医療班の人間に付き添われて医務室へと行った。

「本当、訳わかんねえな。あの兄ちゃんは運が悪かったな」

介抱をしていた男が、春一に向かって声をかけた。彼は血の付いた手を水道で洗って、被害者の男と同じように首を捻っていた。

「犯人は見失っちゃったかい？」

「すみません。スタンドに入られて、撒かれちゃいました」

「まあ、しょうがねえな、この人数だもんよ。兄ちゃんも、びっくりしたろ？」

「ええ。何があったんでしょね？」

「あの兄ちゃんの言うとおり、犯人はいきなり来ていきなり殴って、逃げちまったんだ」

「とりあえず、この件は警察に任せましょう。介抱ありがとうございます」

「気にすんな」

その後そのおじさんは、被害者の見舞いに行くと言って現場から離れた。春一もそこから離れ、外野スタンドへと戻った。

「おう、兄ちゃん、今日は中止だったよ。お疲れさん」

春一が自分のいたところに戻ると、隣のおじさんがそう言った。この豪雨で試合は中止らしい。五回終了時点で試合は成立したため、この試合は引き分けということになった。

「お疲れ様でした」

春一はそのままその場に立ち尽くした。雨が降っているというにもかかわらず、構わず地面を睨む。

（あれは、間違いなく妖気だった。犯人は、妖だ。ちくしょう……！）

夏輝は帰ってきた春一を見て驚いた。テレビ中継で見ていたから雨の影響で試合が中止になったのは知っているが、まさかこれほどまでにびしょ濡れになっているとは思わなかった。しかし、それ以上に驚いたのは彼が静かな怒気を纏っていることだった。ユラユラと、不穏なオーラが春一の体から溢れ出ている。

「ハル、何かあったんですか？」

「ちよつとな。とりあえず風呂行ってくるわ」

春一がお風呂から出てリビングに入ると、夏輝が冷たい水を差し出した。

「サンキュー」

「それで、何があったんですか？」

「お前意外とせっかちなだね。女に嫌われるよ？」

「ハル、そういうのはもういいですから」

溜息をいつて言う夏輝に、春一はべ、と舌を出して、椅子に座った。そして、球場であったことをそのまま夏輝に話して聞かせる。

「そんなことがあったんですか」

「わかつてることは、事件を起こしたのは妖だつてこと。スタンドに逃げられたから、人間の気配と混ざつちまつて妖気はそれ以上追えなかった。目撃者もないし、被害者も相手の顔を見ていない」

「厄介な事件ですね……」

「まあな。だが、犯人は絶対捕まえる。俺の街でこれ以上のヤンチャは、させねーよ？」

不吉に笑う春一がどことなく恐ろしさを湛えていて、夏輝は何も言わずにただ黙った。

その次の日も、春一は球場に足を運んだ。三連戦の最終日、今日こそは勝ちたい試合だ。しかし、春一の目的は野球とは別にあつた。それはもちろん犯人捜し。もしかしたら今日も来ているかもしれない可能性はあつた。春一はいつもはやる気のない目に力を込めて、辺りの気配を探っていた。

事件があつたトイレは封鎖されており、入り口の前には警備員が立っていた。そのため春一はそこを避けて、他の犯行が起こせそうな場所を徹底的に調べた。休憩ができるようになっていいるベンチや喫煙室、他のトイレ。球場を見回り、相手チームのスタンドも回つた。相手チームのユニフォームでいっぱいのところを歩くと、さすがに周囲の人間は快く思っていなかったが、春一の鋭い雰囲気には黙るしかなくなる。

「……」

そんな春一のセンサーの中に、何かが引つ掛かつた。今、一瞬だが、かすかに妖怪の気配がした。春一は必死に神経を研ぎ澄ませた。立ち止まり、目を閉じて、ひたすら集中する。周りの音がさあっと遠くなつて、妖怪の気を感じ取る。

（あっちだ！）

春一は方向を定めて、走り出した。人の間を器用にすり抜けながら、春一は徐々に差を詰めていった。それだけ妖気が濃く、確かなものになる。

すると、人ごみの中に妖気を出す犯人に出会つた。春一が距離を詰めると、相手が春一に気付いた。驚いた顔をして、急いで背を向けて走り去ろうとする。

「待てっ！」

春一が叫んで、後を追いかける。妖怪はなるべく人の少ない通路を選んで、逃げて行つた。しかし、春一との差は次第に詰まつた。そして二百メートルほど走つたところで、春一が妖怪の襟首を掴んで止めた。

「捕まえたぞこのヤロウ」



「な、何で今日もいるんだよっ」

春一が妖怪の胸倉をつかみ上げて問いただと、妖怪は情けない声を出しながら涙目になっていた。

「許してくれよ、お願いだよ。出来心ってやつで……」

「正直に言え」

「は？」

春一は弁明を繰り返す妖怪に真剣な顔をして問うた。襟首を掴む手に力を込めて相手を牽制しながら、一言。

「犯人は、どこだ？」

「へ？いや、だから、オレが犯人で……」

きょとんとして弁明にも力がなくなる妖怪に対し、春一の顔は依然厳しいままだ。春一は妖怪の襟首から手を離し、そのまま腕を組んだ。妖怪はそのまま逃げることもできたのだが、春一の禍々しいオーラがそれを許さない。

「お前が本当の犯人じゃないことはわかってる。言え、犯人はどこだ」

その言葉に、妖怪は押し黙った。そして見る見るうちに彼の顔から汗が噴き出す。

「こ、根拠は？オレが犯人じゃないって根拠」

「妖気つてのはな、妖一人一人によって微妙に違う。人間の指紋が違うように、妖怪は気配が違う。それは極微小な違いだが、神経をすませて気配を探れば違いは分かる。お前とこの間の犯人とでは微妙に妖気が違う。それに、この間の犯人は俺と足の速さが一緒くらいだった。追いかけても差は縮まらなかったからな。だがお前とは差を縮められた。犯人の取り換えをしたとみるのが妥当だろう？」

妖怪は驚いたようにぽかんと口を開けて春一の顔をまじまじと見ていた。その沈黙こそが春一の推測が確証であると告げていた。

「お前を使っているのが、本当の犯人である妖怪だ。そいつは今どこにいる？言ったらお前は解放する」

春一の言葉に、妖怪は少し迷っているようだった。もう自分が偽物であることは見破られている。しかも自分ではこのまま逃げ切れそうにない。だがこのまま大人しく言われた通りにすればどんな仕打ちを受けるかわからない。焦燥と恐怖が胸の中で入り混じる。

「な、なあ、アンタ、オレの身の安全を保障してくれるかい？オレ

はただ寿命が長いのが能力の妖怪なんだ。膂力はないし、自分で言うのもなんだが肝っ玉も小さい。このまま素直に引き下がったら、オレの雇い主に狙われるかもしれない」

「それは保証しよう。それに、安心しろ。その雇い主って奴は、俺がぶっ飛ばす」

ニイ、と笑った春一に、妖怪は渋々口を開いた。

「この球場の一塁側内野スタンドの近くに、今は使われていない器具庫がある。そこに雇い主の妖怪はいる」

「わかった。約束通り、お前は解放するし、身の安全も保障しよう。四季文房具店に行くといい。理由を店員に話せば、保護してくれる。これを見せれば信用するよ」

春一は自分の指からシルバーの指輪を外して、妖怪に持たせた。そして春一は器具庫の方へと走った。

器具庫の前へ来ると、春一はそこから確かな妖気を感じ取った。間違いない、昨日自分が追っていたのと同じ妖気だ。

春一はドアをそつと開けた。暗闇が支配する部屋の中。そこに一歩入ると、突如春一の頭に衝撃が走った。

バキッ

何かが折れた音がして、次いでカランカランと硬いものが転がる音がする。

「ぐあ……」

呻き声を発したのは、春一ではなく妖怪だった。

妖怪はドアの内側に潜み、春一がドアを開けて中に入った瞬間、角材を振り下ろした。だが、その角材は石頭というより鉄の頭を持つ春一の前に無残に折れた。おまけに春一の頭に当たった衝撃で、角材を握っていた自分の手がしびれ、武器である角材を落としてしまった。

「挨拶がそれか？」

春一は暗闇の中を手で探ってスイッチを見つけ、部屋の電気をつけた。眩しさに目を細める妖怪の前に、春一の長身がぬつと現れる。「お前のことを一つだけ褒めよう。凶器にバットを使わなかったことだ。もし使っていたら、俺はお前を許せない所だった」

妖怪の額から、冷や汗が流れ出る。彼は密かにポケットを探り、手を出そうとした、刹那、春一の手が妖怪の腕を掴む。妖怪の手には、大きめの石が握られていた。そこには血痕があった。

「成程ね。昨日の人の時はその石で殴ったのか。だが、往生際が悪いのは感心しねえな」

春一の強い握力に手が言うことを聞かなくなり、妖怪はその石を落とした。乾いた音が部屋の中に響き渡った。

「よくも同じファンの仲間を襲ったな。これでも食らえ」

春一は大きく頭を振りかぶり、そして最強の頭突きを妖怪に食わせた。

口と鼻から血をだらだらと垂らして倒れる妖怪の後ろ手を縛り、春一は枢要院へと連絡を付けた。彼が電話を切るうとすると、相手がそれを引きとめた。

『話がある。そのままそこで待っていてくれ』

「は？ 話？ …… 何の？」

『大事な話だ。すぐに行く』

相手はそれだけ言って、一方的に電話を切った。

春一はその場で頭の上にクエスチョンマークを並べた。自分が枢要院を嫌っていることは向こうも承知済みだ。それどころか枢要院も春一とはなるべく接点を避けようとしているきらいがある。そんな関係が続けていた両者だが、突然枢要院の方から話があると申し出てきた。今までにないことだ。

本当は枢要院の申し出なんて無視して帰ってしまおうとも考えたのだが、先ほどの相手の声がどうしても鼓膜にこびりついている。非常に重要なことを告げるような、そんな声だった。

春一はドアの前と部屋の中を五往復した結果、そのままそこで待つことにした。

十分後、枢要院の妖怪がやってきた。その面子を見て、滅多に見開かれることのない春一の目が驚きで丸くなった。

「アンタ……。なんで、トップのうちの一人がここにいる」

そこにやって来たのは、犯人を拘束するための警察官のような妖怪達数人。そして、その他に、枢要院を仕切る「長老」と呼ばれる三人の妖怪たちの内の一人、奈多<sup>なた</sup>。つまり、枢要院のボスの一人が、直々に春一の元を訪れたわけである。

奈多は白い長髪をオールバックにして背に流し、口の周りを覆うひげも髪のとと同じ色をしていた。身長は春一と同じほどだが、春一を上回る威圧感があった。

「話があると言っただろう。よく、逃げずに待っていたな」

高圧的な態度と言葉が大嫌いな春一にとって、この老妖怪に頭突きをかまして逃げてやろうかとも思ったのだが、どうにもそういう雰囲気ではないらしい。

「話ってのは何なんだよ？俺さっさと野球観戦してーんだけど？」

球場では既に試合が始まっている時間だったが、この器具庫は静謐を維持していた。すべての音が彼らの周りからなくなってしまったようだ。

「お前は回りくどいのは嫌いだから、単刀直入に言おう」

その前置きが回りくどい、と内心で思いながら、春一は無言で続きを促した。

「ある妖怪の組織が、お前のことを狙っている。四季春一、お前をだ」

春一は最初、何を言われているか全くわからなかった。頭の回転は速い方だが、それでもうまく飲み込めない。

「俺が狙われてる？妖怪に？」

「そうだ」

「……詳しく話を聞こう」

奈多は犯人とそれらを拘束する他の妖怪達が部屋から出たのを見計らって、話を切り出した。

「今日、情報屋の夢亜<sup>むあ</sup>から連絡が来た」

夢亜というのは春一の学友である情報屋で、彼は様々な情報を扱っている。春一に入る枢要院からの依頼は、夢亜を介して伝わる。いわば枢要院と春一の中継地点にいる、なくてはならない存在だ。

「ここどころ、妖怪の世界では犯罪が多発している。傷害から窃盗、強盗まで、種類は問わない。そして、その犯罪を起こしている犯人は、全員ある組織に属していることが分かった」

「組織？」

「名を、コバルトという。彼らの目的は、この妖怪世界を統べること、そして、四季春一、お前を潰すことだ」

その言葉に、春一は黙った。職業上、妖怪たちの恨みを買うことはよくある。今回のような事件は今までに何回もあった。妖怪達を助けてきた一方で、枢要院に差し出したことも何回もある。だから逆恨みをしたいくつかの妖怪が、自分を狙っても不思議はなかった。だが、今回のことは腑に落ちない。

「何で、組織まで作った？俺を潰すだけなら、直接来ればいい。何で枢要院まで敵に回すような真似を？」

「さっきも言ったが、奴らの目的は、妖怪達の頂上に君臨すること

だ。たてつく者達を暴力的に抑え込み、自分たちが妖怪の秩序であると言わんばかりに世界を闊歩することこそが、奴らの真の目的。それには四季春一、お前が邪魔なのだ。目の敵にされているのはお前だけではない。勿論枢要院も的にされている。だが、枢要院は妖怪世界の警察ともいえる組織。それに比べ、お前は差し詰め私立探偵といったところ。だから、まずはお前を潰そうということなのだろう」

そこで奈多は一息ついた。そして春一を若干の憐憫を込めた目で見る。春一は真剣な顔をして床の一点を見つめていた。

「お前がこれを機に妖怪の世界から手を引くというなら、コバルトの連中には私から言っておこう。そうすればお前に危害が及ぶことはない。人間としての生を心行くまで堪能すればいい。それもまたお前の道だろう」

その言葉に、春一は頭をポリポリと掻いて、奈多に向き直った。そして自信満々に、二カッとした笑顔を見せて言い切った。

「俺は四季春一、妖万屋だ。売られた喧嘩は、買ってやる」



春一はコバルトとの勝負に、単身で乗り出した。本来ならば助手である夏輝に事情を説明し、必要があれば丈や琉妃香に協力を申し出るところだが、今回は一人で動いている。理由は一つ。危険な事件に、周りを巻き込みたくなかった。これは春一個人が標的にされていることであり、他の人間達にまで迷惑をかけるわけにはいかない。故に春一は、今回に限って一人で動くことにした。

そんな中、春一がサッカーの試合観戦から帰っているときに、彼の前で一人の男が立ち止った。パツとしない男で、一目見間違えればチンピラにも見えた。春一は目を細めて睨みつけながら、止まった。

「あの、ちょっとお尋ねしたいんですが」

「何ですか？」

「今日この辺りで黒いジャージを着た男を見ませんでしたか？黒いジャージに赤いラインが入っていて、背は百七十センチくらい。中肉中背の二十代半ばとみられる男なんです」

「さあ……。今日はほとんどスタジアムにいたんで、わかんないですね。なんかあったんすか？」

春一が訝しげに聞くと、男はポリポリと頬を掻きながら困ったように言った。

「私はこういうもんなんですけどね」

そう言つて、男は懐から手帳を取り出した。その黒い手帳には、桜の代紋が輝いていた。

「今日の夕刊には載りますから言いますけど、すぐそこに病院の跡地があるでしょう？そこで、殺人事件があったんですよ」

「な……。本当ですか？」

「ええ。それで、犯人の目撃情報を取っているんです。じゃ、ご協力ありがとうございます。近頃は物騒ですからね、お兄さんも気を付けてくださいよ」

「はい。ご苦労様です」

春一は軽く頭を下げながら、その刑事を見送った。

家に帰ると、早速ニュースで事件が報道されていた。殺されたのは四十代の男。背中を鋭利な刃物で一突き。即死状態だったという。ジャーナリストをしていたことから、以前の報道で何か恨みを買っていた者の犯行ではないかと報じられていた。犯人の特徴は春一が刑事から聞いたのと同じで、最後に情報提供先である数珠署の電話番号が表示された。

「すぐ近くじゃないですか。嫌な世の中になりましたね」

「ああ」

春一と夏輝がため息をつくとき、春一の携帯が振動した。着信の相手は夢亜だ。いつもはメールなのに、今日は珍しく電話だ。

「もしもし？」

『ハル、事件だ。数珠市の美術館から絵が盗まれた。犯人は妖怪、ムササビみたいに飛んだっていう証言から、種族はセイルと思われる。犯人はそのまま東の方向へ飛んで逃走』

「わかった、すぐ行く」

『それと、これはまだ公開されていない情報なんだが、今回の窃盗事件と、さっき起こった廃病院での殺人事件には、共通点がある』

「共通点？」

『二つの現場には、13という数字が残されているんだ。そして、荒いドット模様の青色の図形。その図形の中には赤い点が記されている。写真を送る』

電話が切れると同時に、一通のメールが届いた。添付されているデータを開くと、写真が開かれた。その写真には、夢亜の言った通り荒いドット模様の青色の図形が書かれていた。両方とも壁に水色

のクレヨンのようなもので書かれており、逆さの台形のような図形が、ドット模様で描かれていた。そしてその一角には、赤い印がやはりクレヨンのようなもので書かれていた。その赤い印は二つの現場で位置が微妙に異なっており、何を指し示すのかは全くわからない。

春一はその写真を見て携帯を閉じ、すぐに家を出た。

春一がまず向かったのは窃盗事件があったという数珠市の美術館。バイクで十分程度のところにある美術館は、現在黄色いテープが張り巡らされており、一般人の立ち入りを禁止していた。

「中に入らないで下さい」

春一は正面から入るのを諦め、事件があった部屋の裏手に回った。「つたく、これじゃ俺が犯人扱いされるぜ」

木に登って裏手の天窓から中をのぞくと、事件現場が見えた。ちょうど壁にぽっかり空いたスペースがあり、絵があったであろうその下には作品の説明書きが淋しく残っていた。

「盗んだのは普通の絵だな。有名な作品じゃない。……お、あれか」

春一は双眼鏡を目に当てて、その横にクレヨンで書いてある文字と図形を見た。図形の方は夢亜からのメールで見ているが、文字は見えない。改めてみると、黒いクレヨンで13と書かれていた。1と3の間は狭く、パソコンで言ったら半角で書かれているのかもしれない。

「ふうん？ なかなか手の込んだことするじゃねーかよ。しかし、気になるな。あの文字と図形、どこで見たことある気がするんだよねー？」

その後も頭を捻ってみたが、思い出せることはなく、春一はそのまま木から降りて次なる事件現場へと向かった。

廃病院も、同じく立ち入り禁止になっていた。春一は野次馬たちとは別の方向に向かって、病院の裏手に回った。そして小さな裏門の鍵が閉まっていることを確かめると、門の前で一人唸った。

「うーん、これ蹴り壊して事件の手がかりにされても困るし……仕

方ねえ」

そういつと春一は、そこから数十歩先にある壁の前で立ち止まった。壁の向こうには廃れた病棟がそびえており、廃墟になって尚、重厚感を醸し出している。壁には穴が開いているが、そこには板が打ちつけられていて、ちよつとやそつとじゃ動かないように見えた。

「あのころと変わってなけりや……」

春一は板をそつと手前に引いた。がこつと音がして、錆びた釘が一斉に抜けて、板が外れた。

「懐かしいな」

彼がまだ中学生の頃、この廃病院で肝試しをするためにこの板の釘をひとつひとつバールで抜いて板を外したことがある。その時、それがばれてはいけなないと、来るとき抜いた穴に釘を差しこんで、あたかも一目見ただけでは何も変わりがないように見せかけたのだ。その時の名残が、いまだに残っていた。まさかこんなところで役に立つとは思わなかったが。

春一がその穴を潜り抜けて病院の中に入ると、カビ臭いにおいがむつとした。この病院が廃棄されたのは春一がまだ小さい時で、小学校に上がるか上がらないかわからない、そんな時である。この病院の院長が着服をしていたのがばれ、元々大きくもない病院だったし、近くに大病院もあることから、廃院が決定された。だがその後も取り壊す予定などが様々な原因から延期され、結局見捨てられて存在として今も残っている。

足音を忍ばせて階段を上っていくと、にわかに騒がしい場所があった。現場がある階だ。春一はそこからさらに一階上り、通風孔に身を忍ばせた。

「俺マジで泥棒みてえ」

若干笑いながら通風孔の中を進んでいく。音がしないように進んでいくと、現場の部屋のすぐ上まで行くことができた。

現場は生々しいにおいで満ちていた。遺体は既に運び出され、床や壁には体から噴出したであろう血液が飛散していた。鑑識官が足

跡や指紋を調べており、刑事が難しい顔をして立っていた。

その近くの壁には、飛散した血に混じって美術館にあったのと同じ図形と文字が描かれていた。

春一は心の中で警察の捜査にエールを送ってから、静かにその場を後にした。

春一は一回美術館に戻った。そこから東に逃げた妖怪の足取りを掴もうと、戻ってきたのだ。妖怪は東に逃げたというだけで、どこまで逃げたかはわからない。春一は情報収集のために、近くにいた高校生に声をかけた。

「ちよつと聞きたいんだけどさ」

「ああ？」

いかにも高校デビューを果たしましたという風貌の相手は、春一のことを睨み上げるように見た。春一はにっこり笑って、高校生の胸倉を掴み、ぐいつと引き寄せた。

「こつから逃げてった犯人の行方を捜してるんだけど、協力してくんない？」

「な、何でオレが！第一テーマ誰だよ！オレはあの菊泉きくせん高校のモンだぞ」

「菊泉？ああ、あのヤンキー校ね。じゃあ俺のこと知ってるかな？あんまりこの名称は名乗りたくないんだが……」

「何ブツブツ言ってるやがる！」

「俺はトランプの春一だ。わかるな？」

「トランプッ！？」

トランプというのは春一と丈、琉妃香の三人をまとめて呼んだチーム名で、いつの間にか誰かに付けられ、それが広まった。切り札を意味するトランプという単語が、春一のエース、丈のジョーカー、そして琉妃香のクイーンにあてはまるため、いつしかそう呼ばれるようになった。トランプといえば無敗の化け物チームで、相手にしたらただでは済まされないと噂されている。春一はトランプという名前を不良のレッテルを貼られたようだと不快に思っていたが、こ

の際そんなことは言っていられない。

「トランプのエースがこの窃盗事件の犯人を捜していると仲間に伝える。些細な情報でもいい。俺は六時にもう一度ここに来るから、その時に成果を聞かせてくれ。いいな？」

「はいっ！」

高校生はすくみ上った身を震わせ、一目散にそこから立ち去った。走りながら携帯電話で仲間たちに電話をかけているところを見ると、情報収集の方は任せて大丈夫らしい。

「さてと……」

春一は再びバイクに跨り、今度は図書館に向かった。



美術館から五分もかからない所には、数珠中央図書館がある。数ある数珠市の図書館の中でも最大の面積と蔵書数を誇り、そこには常に人が行き交う。春一は調べ物をするためにここにきた。春一の頭のどこかに引っかかるあの文字と図形。それを探すために、彼はパソコンの前に立った。

（あの13の文字は何を意味するんだ？）

13といえば不吉を表す数字だ。不吉を届けに来たと言いたいのだろうか。しかし春一の深いところにある記憶が、それは違うと言っている。

（あの文字も、図形も、昔の記憶じゃない。最近、最近どこで見ているはずだ。思い出せ、俺は最近何を見聞きした？）

パソコンの前で黙考する春一の脳裏に、何かが浮かんで消える。つかみかけているのに握れないそのもどかしさに、段々と集中力がなくなってくる。

（落ち着け。苛立ちは集中力を妨げる。俺の記憶を呼び起こすんだ。長期記憶に保存される情報の量には限界はない。そしてそれは半永久的に保存されるってこの間授業でやっただろ）

その時、春一の頭に何かが閃いた。彼は閉じていた眼を開け、パソコンの前から一般書コーナーへと足を向けた。そこには様々な学問の専門書が並んでいる。春一は自分が勉強する心理学のコーナーの前で足を止め、一冊の本を手を取った。その本をばらばらとめくり、目当てのページを探す。

（あつた！）

春一の頭の中にかかっていた靄が、一気に晴れていく。

（でもこれが何を意味するんだ？）

春一は再びパソコンの前に立ち、気にかかる言葉について検索をかけた。

（まさか……そういうことか？）

そこで春一は時計の針が六時少し前を差していることに気が付き、図書館から出た。

美術館の前の野次馬は、減少していた。その中に、例の高校生がいた。

「お疲れ様です！」

先ほどとは打って変わった態度で春一のことを迎える。春一はそんな彼に缶ジュースを差し出して、成果を聞いた。

「どうだった？」

「オレの仲間が見たところだと、そのムササビは数珠の森に消えてったそうっす」

「数珠の森……」

数珠の森というのは、ここから十五分ほどのところにある小さな森林公園だ。自然と触れあえる様々な施設や遊具が人気を呼んでいる。

「あそこの近くにあるものって言ったら……」

「アスレチックと、ゴルフ場と、サッカースタジアムと、ショッピングセンターとかですよね？」

春一の目が見開かれ、そしてその口には笑みが浮かぶ。高校生は、まるで獲物を前にした肉食獣のようだと思った。

「サンキュー。お前のお陰で事はうまく運びそうだ。仲間にもよろしく言ってくれや」

「は、はいっ！あざっす！」

春一はそこから走って自分のバイクに向かった。

春一は数珠市サッカースタジアムの駐輪場にバイクを停めた。そして、窃盗事件の時現場に残されたあの図形を携帯で再生した。

「やっぱりだ……」

スタジアムの案内板。そこには席の区分や番号が記されていた。サッカースタジアムの席には区分があり、アウェー側とホーム側などに分かれている。春一が見ていたのは、そのアウェー側のサポーターズゾーンと呼ばれる席。ホーム側のゴール裏とゴールの斜め後ろのゾーンのことで、ずっと立って応援をするような人間が取る席だ。そのゾーンの形が、携帯の中の画像と見事に一致した。このドット模様は、席のことだったのだ。一つひとつの席が四角く表示されるこのスタジアムの席表は、席と席の隙間を開けないように描くと台形のドット模様になっていた。

（問題は、次の試合……）

春一はその横にあるこのスタジアムの日程表を見た。本来なら次の試合は一週間後だが、日程表には次の日に高校対ユースの試合があると書いてあった。プロの試合ではないが、このスタジアムは使われる。

春一は頷いて、その場を後にした。

次の日、春一はスタジアムのチケット売り場で当日券を買い、中に入った。ピッチでは若い男の子たちがウォームアップをしていた。観客はほとんどが父母やその関係者で、時折サッカーチームの関係者らしき人たちの姿も認められる。高校生たちの試合といえど人数はそれなりに入っており、人間の気配に混じって妖気はわからない。春一は赤い点が印してあった場所へと足を向けた。すると、段々妖気が濃くなってくる。

問題の場所には、二匹の妖怪がいた。何やら話をしながら紙を交換している。春一は気配を一切絶ち、その妖怪達に近づいた。

「よう、こんにちは」

その二匹の妖怪の背後を取り、二人に肩を組む格好で春一は顔を出した。突然現れた春一に、妖怪達はびっくりと身を震わせたが、肩を組まれてしまっている以上身動きが取れない。強く体を動かそうとしても、春一の押さえつける力の方が上手だ。

「まあまあ、まだゲームも始まってないんだし、そんな急ぐなよ。自己紹介が遅れたな、俺は四季春一。妖万屋だ。何でここに来たかは、わかるよな？」

「どうしてあの暗号がわかった……？」

二匹の内、格が上とみられる方の妖怪が口を開く。横目で春一の顔を見ると、彼は憎たらしいほど笑顔満面だった。

「現場に残されてた図形も、文字も、どこか見覚えがあった。図形はそりゃ覚えてるよな。一ヶ月に一回は必ず来てるスタジアムの座席表なんだから」

そこで春一はあははと笑った。若干自嘲的な意味の笑いだが、それでも表情は爽やかで清々しい。

「13の文字の方は、俺の真面目さが功を奏したっていうのかな」  
にやりと冗談っぽく笑う春一に、妖怪は何も言えない。続きを待っている。

「俺心理学科んだけどさ、心理学の授業中にあの文字を見てるんだ。あれは文脈効果の説明で出される文字だ。隙間が狭い13は、12と14の間であれば13に見えるが、AとCの間であればBに見える。人間は、同じ文字でもその前後の文字や自分の持つ知識などによって、知覚や認知が影響される。それが文脈効果。そこで、大事なものはその次だ。この文脈効果のように、情報を処理する際に知覚や認知が影響を受けることを、概念駆動型処理という。言い換えると、トップダウン処理だ」

妖怪の喉からごくりという音が聞こえる。唾を飲み込んだのが、はつきりとわかった。

「このトップダウンという言葉だが、これは心理学の言葉ってわけじゃない。本当は経済用語だ。経済用語でトップダウンとは、会社の上層部が意思決定をして、それを下部へ支持する管理方式のことを言う。だから思ったわけさ。お前らコバルトは犯罪組織。組織の上層部が犯罪の計画を立て、それを下部の実行部隊に伝えるための合図が、この13って文字の意味なんじゃないかと。それに加えあの図形。つまり、あの図形と文字の意味は、『上層部から下部へ伝達。次の犯行計画はスタジアムのこの場所で授ける』ってことだ。だから、ここに来ればコバルトに接触することができると思った」

そこで春一は顔から笑みを消した。冷たい表情になって、肩を組んでいる腕に力を込めて妖怪の首を圧迫する。

「俺をコバルトの頭首に会わせろ」

ギリギリと締め付けるその苦しさには敵わず、妖怪は首をぶんぶん縦に振った。

「わかった、教える。教えるから腕を離してくれ」

呻き声とも取れる聞き取りにくい言葉に春一は腕の力を緩めた。

妖怪は二、三度深呼吸をして、息を整えた。

「場所は……数珠市の北西にある森の小屋だ。元々森にある電灯とかの電力管理をしてる小屋だ。わかるだろ？市役所の裏手にあるあの森だよ」

「ああ、あそこか。よし、お前らは今日のところは見逃してやる。だが、もしこれに懲りず犯罪行為を繰り返したら……その時は、わかってるよな？」

妖怪達はさつきよりも大きく首を振った。ちぎれんばかりに振っている。春一はそれを見届けると、席を立った。向かうは、市役所裏の森にある小屋。そこでコバルトと、決着をつける。

市役所の裏手には、森がうつそうと茂っている。豊かな自然をアピールする数珠市としては、街の真ん中に市役所を建てるよりも、森の近くに建てた方がより良い効果を狙える。そんな理由から、街の中心から少し外れたこの森林地帯に市役所は建っていた。

その森を中ほどまで進むと、少し大きめの小屋がある。自然で覆われた中にコンクリートの無機質な壁の塊が存在するのは珍妙だったが、電力を管理するという役目がある以上、これは致し方ないことだった。

その小屋に春一が近づく。中からは強力な妖気が感じられる。意を決して、春一は一步進んで小屋のドアを蹴り飛ばした。蝶番がばらばらと地に落ちる。

「ちわー。妖万屋の春一です」

中に一步入って自己紹介をする。頭首の妖怪は、部屋の真ん中にある赤い革張りのソファに悠然と座り、春一を迎えた。見た目は二十代後半くらいだろうか。黒い短髪に平々凡々な顔つき。体躯を見ても、ごく普通の人間だった。

「初めまして、春一君。僕はコバルトの頭首、リアルだ」

「ハジメマシター」

部屋の中は電気がついていると言えど、薄暗かった。部屋の隅の方には配電盤があり、それは古く、本当に電力が供給されているのか不思議だった。その他には頭首の妖怪が座っているソファが中心に一つあるだけで、あとは何もない。

「君に会いたかったんだよ。僕らの邪魔をするから、どんな人間だろうかと思ってね。それで、招いたんだ」

それを聞いて、春一はべ、と舌を出した。気に食わない、と言

ただだ。

「だろーと思つたよ。お前の仲間の妖怪があんなにすんなりとお前の居場所を言うもんだから、おかしいとは思つてたんだよ」

「氣付かれていたか」

リアルは困つたように笑つたが、目はあくまで楽しそうに歪められている。この状況を楽しんでいるようだ。

「僕たちのこと、どれくらい知っているの？」

「あの殺人事件はお前の仲間がやったものだろ？妖怪が実在するという記事をあの男に書かれそうになったから、殺したつてところじやねえのかな？」

「良く知っているね」

「あの文字と図形がある時点でコバルトの仕業だし、とすれば動機はそれくらいだろう？」

「君は探偵になれるね」

「俺には他人の不倫事情を根掘り葉掘り探る趣味はねえよ」

リアルはハハッと笑つて、春一に向き直つた。そして、突如狂気の笑みに歪められた表情で立ち上がった。

「春一君、僕たちはね、この妖怪世界を統べるために存在するんだよ」

「聞いたよ」

「じゃあ、それには君が邪魔ということも聞いたね？」

「勿論」

「春一君、君は人間のくせに僕たち妖怪の間に割つて入ってくる。

それはね、非常に無粋なことなんだよ。わかるだろ？同じ種類の仲間たちで固まっているところに、異形の者が入り込んでくるんだ。何でそんなことをするんだい？」

「俺の勝手だろ」

春一は挑発的な笑みをリアルに向けた。彼はそれが気に食わなかったらしく、忌々しげに舌打ちをした。

「まあ、そうかもしれないな。でもね、春一君。それを快く思わな



い妖怪達がいるということ、忘れないようにね。君はいつだって、狙われているんだ」

「いちいち言ってもらわなくても、わかってるよ。……で？ 敢えて俺を招くくらいなんだから、君は俺に捕えられない自信でもあるのかな？」

「それはあるとも。君に負けるような僕じゃないんだよ。春一君、先にネタばらしをしてしまうけど、僕は筋力がずば抜けてるわけでもないし、喧嘩が強いわけでもない。僕の実力はね、知能がとてもし高いことなんだ。人間の世界ではIQでよく測られるけどね」

「ふうん」

「僕はそうして部下達を使ってきた。そして、今もね」

リアルがそう言っていると、春一の背後にふっと妖気が感じられた。とても強い妖気だった。

（今まで気配を消してたのか！）

「春一君、君が石頭だということは重々承知しているよ。だから、頭は狙わない」

春一が自分の迂闊さに舌打ちをすると同時に、強い衝撃が彼の顔を覆った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9957v/>

---

TRUMP?

2011年9月26日20時33分発行